

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 XVI

古志本郷遺跡V

出雲国神門郡家閔連遺跡の調査



2003年3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
島根県教育委員会

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 XVI

古志本郷遺跡 V

出雲国神門郡家閨連遺跡の調査

2003年3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所
島根県教育委員会

序

国土交通省山雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分に留意しつつ関係諸機関と協議しながら進めていますが、避けることができない埋蔵文化財については、事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では、放水路の早期完成を目指して、島根県教育委員会の御協力のもとに、平成3年度から12年間にわたり発掘調査を行ってまいりましたが、今年度の本報告書の作成をもちまして終了することとなりました。この間には、数多くの貴重な遺跡や遺物が発見され、先人の技術の高さや努力の跡を目の当たりにすることができました。これらの調査成果が、郷土の歴史教育や地域活動などに広く活用されることを願うと共に、埋蔵文化財に対するより一層の关心と御理解を得るための資料としてお役立てていただければ幸いに思います。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導・御協力いただきました島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心から御礼申し上げます。

平成15年3月

国土交通省中国地方整備局山雲工事事務所

所長 船橋昇治

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現 国土交通省中国地方整備局）からの委託を受け、平成3年度から斐伊川放水路建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりましたが、今年度の調査報告書の刊行をもって終了する運びとなりました。本書は、このうちの平成10・11年度に発掘調査を行った古志本郷遺跡F・G区の成果をまとめたものです。

斐伊川・神戸川の二大河川が流れる出雲市周辺は古くから栄えた地域であり、数多くの歴史的文化遺産が残っています。本書に掲載した古志本郷遺跡F・G区の調査では古墳時代前期・古墳時代後期の土器が多数出土したほか、奈良時代の大型建物群を確認しました。この建物群は奈良時代に編纂された『出雲國風土記』に記載され、当時地方行政の中枢であった出雲國神門郡家の一端であると考えられます。こうした調査成果は、この地域の歴史を解明していく上で貴重な資料になるものと思われます。本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり御協力いただきました地元の皆様、国土交通省出雲工事事務所、出雲市教育委員会をはじめ、関係の方々に対して心からお礼申し上げます。

平成15年3月

島根県教育委員会

教育長 広沢 卓嗣

例　　言

1. 本書は建設省中国地方建設局（現 国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、島根県教育委員会が平成10・11年度に実施した、斐伊川放水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で扱う遺跡は次の通りである。

島根県出雲市古志町 古志本郷遺跡（F区・G区）

3. 調査組織は次の通りである。

調査主体 島根県教育委員会

◇平成10年度 現地調査

事務局 島根県教育庁文化財課 勝部 昭（課長）、島地徳郎（課長補佐）、埋蔵文化財調査センター 宍道正年（センター長）、秋山 実（課長補佐）

調査員 内田律雄（主幹）、川上恭司（教諭兼文化財保護主事）、松尾充晶（主事）、梶谷泰子（臨時職員）

◇平成11年度 現地調査

事務局 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 宍道正年（所長）、秋山 実（総務課長）、松本岩雄（調査課長）、今岡 宏（総務係長）

調査員 内田律雄（主幹）、岡田充哲（教諭兼文化財保護主事）、持田和男（教諭兼文化財保護主事）、守岡利栄（文化財保護主事）、勝部智明（主事）、阿部智子（臨時職員）、梶谷泰子（臨時職員）

◇平成14年度 報告書作成

事務局 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 宍道正年（所長）、卜部吉博（副所長）、内田 融（総務課長）、川原和人（調査第2課長）、坂本淑子（総務係長）

調査員 萩 雅人（主幹）、松尾充晶（主事）

4. 発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）については、建設省中国地方建設局・社団法人中国建設弘済会・島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

5. 発掘調査・報告書作成にあたって、下記の方々・諸機関から有益な御指導・助言と御協力をいただいた。記して謝意を表す。

◇調査指導（50音順、敬称略、所属・役職名は平成10年時）

穴沢義功（たたら研究会委員）、鈴野和己（奈良国立文化財研究所）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、蓮岡法暉（島根県文化財保護審議会委員）、山中敏史（奈良国立文化財研究所）

◇調査協力（50音順、敬称略）

景山真二（大社町教育委員会）、西山要一（奈良大学文学部）、米田美江子（出雲市教育委員会）、出雲市教育委員会、古志史談会

6. 本書掲載の遺構写真は上記現地調査の調査員が、遺物写真は松尾充晶が撮影した。

7. 本書の編集・執筆は埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て松尾充晶がおこなった。

なお第9章は、川鉄テクノリサーチ株式会社に委託して実施した分析結果の報告書を転載している。

8. 本書掲載の出土遺物および実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

調査参加者

1. 発掘調査作業員

◇平成10年度（F・G区）

吾郷正夫、板倉四郎、伊藤猪造、伊藤ゆき江、糸原幸子、江戸友義、梶谷光夫、川谷重子、小谷四郎、小原喜美子、佐藤益子、竹下邦明、田部 博、玉木寛平、寺本武夫、藤内嘉吉、永井宏子、長岡公子、長岡恵美、中島三恵子、長島三千代、永瀬廣吉、錦織喜多子、平尾文子、眞庭千代吉、三浦節子、三島輝夫、持田貞夫、山崎佐代子、吉田 甫、渡部愛子

◇平成11年度（F区）

安達幸雄、有藤躬基子、伊藤ゆき江、伊藤幸世、金本マス子、川谷重子、佐藤益子、高見トヨ子、高見正己、多久和毅、新田幸男、船木 昇、古川民子、松崎久子、矢田千也子、矢田広利、山毛永行、山本綾子、渡部光子

◇ “ ” （G区）

足立今栄、飯西美代子、石川圭一、石川トメ子、石飛すみえ、板垣サチ子、板倉葵子、糸賀エミ子、太田幸一、勝部清美、勝部久江、木村光利、小原喜美子、齊藤淳一、佐々木明美、杉原節子、高見和子、武田頤慶、玉木美恵子、永井宏子、長岡公子、錦織喜多子、畠豊美、原ミチ子、半井文子、福庭 正、三浦節子、矢田君枝、山本綾子、渡部愛子

2. 遺物整理・挿図添書

浅井順子、天津文子、石川真山美、門脇山己子、来海順子、坂根喜代美、中島直美、横野喜久恵

3. 出土遺物の実測

遺物の実測図作成は調査員の他、浅井順子、阿部春枝、石川真由美、加藤麻子、金津まり子、米海順子、須山啓子、田村尚子、秦 愛子、福田市子、堀江五十鈴がおこない、天津文子、門脇山己子、坂根喜代美が添書した。

凡　例

1. 挿図中に図示した北方位および平面直角座標系のXY座標は、日本測地系による測量法第III座標系の座標北および軸方位を指す。したがって古志本郷遺跡G区東端地点における座標北は、磁北からみて $7^{\circ} 0'$ 、真北からみて $0^{\circ} 19' 57''$ 東にふれている。

2. 挿図中のレベル高は海拔高を示す。

3. 挿図の縮尺は図中に示した。

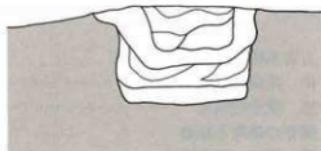
4. 表記にもちいた遺構略号は以下のとおり。

SA：柵列、SB：掘立柱建物、SE：井戸、SD：溝、SK：土坑、SX：その他の遺構

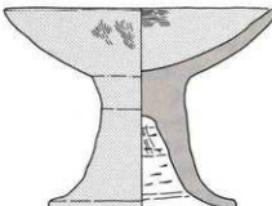
5. 本書中のFig. 2は国土地理院発行の1/25,000地形図「大社」「出雲今市」「宍道」「神西湖」「神原」「本次」を縮小・加筆して使用した。

Fig. 3・Fig. 4は出雲市都市整備部都市計画課作成の「出雲市都市計画図No.26」を縮小・加筆・一部改変して使用した。

6. 土層断面図中のアミかけのうち、特にことわりの無いものは遺跡の基盤層である灰白色～浅黄灰色砂質土層を示す。本文中で「地山」と呼称したものに相当する。



7. 遺物実測図中の内外面アミ掛けは、赤色塗彩が施されている範囲を示す。



8. 遺物実測図中の断面アミ掛けは、遺物の種別を示す。



軟質の土器（弥生土器・土師器・土師質土器・瓦質土器など）



硬質の須恵器・陶器・磁器など

9. 遺物観察表に記載した土器の色調は、基本的に下記の分類基準による。これ以外のものについては、『新版 標準土色帖』に従った。



灰白色（土師器）



灰白色（須恵器）



浅黄橙色



灰色



黄橙色



暗青灰色



にぶい橙色



青灰色



明橙色



オリーブ灰色



橙色



暗赤灰色



灰黄褐色



赤灰色

本文目次

| | |
|--------------------------------|-----|
| 第1章 古志本郷遺跡の位置と環境 | |
| 第1節 地理的環境 | 1 |
| 第2節 歴史的環境 | 1 |
| 第2章 調査の経緯と経過 | |
| 第1節 調査に至る経緯 | 5 |
| 第2節 古志本郷遺跡 既往の調査歴 | 6 |
| 第3節 調査の経過 | 10 |
| 第3章 調査成果の概要と本書の構成 | |
| 第1節 調査成果の概要 | 13 |
| 第2節 本書の構成 | 13 |
| 第4章 遺跡の基本層序と包含層遺物 | |
| 第1節 遺跡の基本層序 | 17 |
| 第2節 包含層遺物の概要 | 20 |
| 第3節 包含層遺物の詳細 | 20 |
| 第5章 F区の調査成果 | |
| 第1節 F区の位置と概要 | 39 |
| 第2節 F区・弥生時代の遺構と遺物 | 50 |
| 第3節 F区・中近世墓の遺構と遺物 | 65 |
| 第4節 F区・水田遺構とその他の土坑・溝出土遺物 | 85 |
| 第6章 G区の調査成果 | |
| 第1節 G区の位置と概要 | 95 |
| 第2節 G区・溝跡の調査 | 98 |
| 第3節 SD39の詳細 | 102 |
| 第4節 SD41の詳細 | 150 |
| 第5節 G区・その他の遺構 | 177 |
| 第7章 官衙関連遺構の調査成果 | |
| 第1節 遺構の概要 | 187 |
| 第2節 遺構の詳細 | 189 |
| 第3節 遺物の概要 | 249 |
| 第4節 その他の溝・土坑 | 279 |
| 第8章 鍛冶関連遺物の調査 | |
| 第1節 出土状況と内容 | 293 |
| 第2節 調査の方法 | 293 |
| 第3節 成果のまとめ | 294 |
| 第9章 古志本郷遺跡官衙遺構に伴う鍛冶関連遺物の分析・調査 | |
| 第1節 はじめ | 329 |
| 第2節 調査項目 | 329 |
| 第3節 調査方法 | 329 |
| 第4節 調査結果および考察 | 331 |
| 第10章 神門郡家と出土遺構の評価 | |
| 第1節 神門郡家の所在地について | 345 |
| 第2節 郡家の認定要件 | 355 |
| 第3節 出土遺構の評価 | 358 |
| 第4節 まとめ | 379 |
| 第11章 総括 | 381 |

挿図・写真目次

| | | | | | |
|--------|-------------------|----|---------|------------------------------|-----|
| Fig. 1 | 古志本郷遺跡の位置 | 1 | Fig.52 | F区黒色土 遺物写真③ | 63 |
| Fig. 2 | 古志本郷遺跡と周辺の遺跡 | 3 | Fig.53 | SK176 道構・遺物実測図 | 64 |
| Fig. 3 | 古志本郷遺跡全体図 | 8 | Fig.54 | SK176 道構・遺物写真 | 64 |
| Fig. 4 | 調査区配置図(F・G区) | 9 | Fig.55 | F区土坑墓分布図 | 67 |
| Fig. 5 | 新聞報道記事 | 11 | Fig.56 | SK12 道構・遺物実測図 | 71 |
| Fig. 6 | F・G区全体図 | 14 | Fig.57 | SK12 道構・遺物写真 | 72 |
| Fig. 7 | 調査区全域航空写真 | 15 | Fig.58 | SK58 道構・遺物実測図 | 73 |
| Fig. 8 | F区十眉図① | 18 | Fig.59 | SK195 道構・遺物実測図 | 73 |
| Fig. 9 | F区土層図② | 19 | Fig.60 | SK58 遺物写真 | 73 |
| Fig.10 | 包含層出土遺物の破片点数・重量比較 | 22 | Fig.61 | SK195 遺物写真 | 73 |
| Fig.11 | 包含層山上遺物 実測図① | 27 | Fig.62 | SK180 道構・遺物実測図 | 74 |
| Fig.12 | 包含層出土遺物 実測図② | 28 | Fig.63 | SK180 道構・遺物写真 | 75 |
| Fig.13 | 包含層川土遺物 写真① | 29 | Fig.64 | SK181 道構・遺物実測図 | 76 |
| Fig.14 | 包含層出土遺物 写真② | 30 | Fig.65 | SK247 道構・遺物実測図 | 76 |
| Fig.15 | 包含層出土遺物 写真③ | 31 | Fig.66 | SK280 道構・遺物実測図 | 76 |
| Fig.16 | 包含層山上遺物 写真④ | 32 | Fig.67 | SK181 遺物写真 | 77 |
| Fig.17 | 包含層出土遺物 写真⑤ | 33 | Fig.68 | SK247 遺物写真 | 77 |
| Fig.18 | 包含層山上遺物 写真⑥ | 34 | Fig.69 | SK280 遺物写真 | 77 |
| Fig.19 | 包含層出土遺物 写真⑦ | 35 | Fig.70 | SK192 道構実測図 | 78 |
| Fig.20 | 包含層山土遺物 写真⑧ | 36 | Fig.71 | SX10 道構・遺物実測図 | 78 |
| Fig.21 | 包含層出土遺物 写真⑨ | 36 | Fig.72 | SX04 道構実測図 | 78 |
| Fig.22 | 包含層川土遺物 写真⑩ | 36 | Fig.73 | SK01 遺物実測図 | 78 |
| Fig.23 | 包含層山上遺物 写真⑪ | 37 | Fig.74 | SK02 遺物実測図 | 78 |
| Fig.24 | 包含層出土遺物 写真⑫ | 38 | Fig.75 | SK07 遺物実測図 | 78 |
| Fig.25 | 包含層出土遺物 写真⑬ | 38 | Fig.76 | SX10 道構・遺物写真 | 79 |
| Fig.26 | 包含層出土遺物 写真⑭ | 38 | Fig.77 | SK192 道構写真 | 79 |
| Fig.27 | F区全体図 | 40 | Fig.78 | F区 土坑道構写真 | 80 |
| Fig.28 | 航空写真 F区全体と周辺の環境 | 41 | Fig.79 | SK01 遺物写真 | 81 |
| Fig.29 | F区道構配置図① | 42 | Fig.80 | SK02 遺物写真 | 81 |
| Fig.30 | F区道構配置図② | 43 | Fig.81 | SK07 遺物写真 | 81 |
| Fig.31 | F区道構配置図③ | 44 | Fig.82 | SX06 道構実測図 | 82 |
| Fig.32 | F区道構配置図④ | 45 | Fig.83 | SX07 道構・遺物実測図 | 82 |
| Fig.33 | F区道構配置図⑤ | 46 | Fig.84 | SX06 遺構写真 | 83 |
| Fig.34 | F区道構配置図⑥ | 47 | Fig.85 | SX07 道構写真 | 83 |
| Fig.35 | F区道構配置図⑦ | 48 | Fig.86 | SX07 遺物写真 | 83 |
| Fig.36 | F区道構配置図⑧ | 49 | Fig.87 | F区西端の水田道構 写真 | 86 |
| Fig.37 | F区黒色土 全体図 | 50 | Fig.88 | SX03道構実測図・写真 | 87 |
| Fig.38 | F区黒色土 道構図①(SX01) | 54 | Fig.89 | F区土坑出土遺物 実測図 | 88 |
| Fig.39 | F区黒色土 道構図② | 55 | Fig.90 | F区溝出土遺物 実測図 | 89 |
| Fig.40 | F区黒色土 道構図③ | 55 | Fig.91 | F区土坑出土遺物 写真① | 91 |
| Fig.41 | F区黒色土 道構図④(SX02) | 56 | Fig.92 | F区土坑川土遺物 写真② | 92 |
| Fig.42 | F区黒色土 道構図⑤ | 55 | Fig.93 | F区溝山上遺物 写真① | 93 |
| Fig.43 | F区黒色土 遺物実測図① | 56 | Fig.94 | F区溝出土遺物 写真② | 94 |
| Fig.44 | F区黒色土 遺物実測図② | 57 | Fig.95 | G区全体図 | 96 |
| Fig.45 | F区黒色土 道構写真① | 57 | Fig.96 | 航空写真 G区全体と周辺の環境 | 97 |
| Fig.46 | F区黒色土 道構写真② | 58 | Fig.97 | G 2区溝跡 道構配置図 | 100 |
| Fig.47 | F区黒色土 道構写真③ | 59 | Fig.98 | SD35・37・38・39・40・41 上層断面図 | 101 |
| Fig.48 | F区黒色土 道構写真④ | 60 | Fig.99 | G 2区溝跡 道構写真 | 104 |
| Fig.49 | F区黒色土 道構写真⑤ | 61 | Fig.100 | SD39 上層断面写真 | 105 |
| Fig.50 | F区黒色土 遺物写真① | 61 | Fig.101 | SD39上面 遺物分布図① | 106 |
| Fig.51 | F区黒色土 遺物写真② | 62 | | | |

| | | | | | |
|---------|------------------|-----|---------|-----------------|-----|
| Fig.102 | SD39上面 遺物分布図② | 107 | Fig.156 | SD41 遺物写真⑦ | 175 |
| Fig.103 | SD39上面 遺物出土状況図 | 109 | Fig.157 | SD41 遺物写真⑧ | 176 |
| Fig.104 | SD39上面 遺物出土状況写真① | 110 | Fig.158 | SE01 遺構実測図 | 178 |
| Fig.105 | SD39上面 遺物出土状況写真② | 111 | Fig.159 | SE01 遺物実測図① | 178 |
| Fig.106 | SD39上面 遺物実測図① | 118 | Fig.160 | SE01 遺物実測図② | 179 |
| Fig.107 | SD39上面 遺物実測図② | 119 | Fig.161 | SE01 遺構写真 | 180 |
| Fig.108 | SD39上面 遺物実測図③ | 120 | Fig.162 | SE01 遺物写真① | 180 |
| Fig.109 | SD39上面 遺物実測図④ | 121 | Fig.163 | SE01 遺物写真② | 181 |
| Fig.110 | SD39上面 遺物実測図⑤ | 122 | Fig.164 | SD29 遺物実測図 | 184 |
| Fig.111 | SD39上面 遺物実測図⑥ | 123 | Fig.165 | SD29 遺物写真 | 184 |
| Fig.112 | SD39上面 遺物実測図⑦ | 124 | Fig.166 | SD34 遺物実測図 | 184 |
| Fig.113 | SD39上面 遺物実測図⑧ | 125 | Fig.167 | SD34 遺物写真 | 184 |
| Fig.114 | SD39上面 遺物実測図⑨ | 126 | Fig.168 | SD42 遺物実測図 | 185 |
| Fig.115 | SD39上面 遺物実測図⑩ | 127 | Fig.169 | SD42 遺物写真 | 186 |
| Fig.116 | SD39上面 遺物実測図⑪ | 128 | Fig.170 | F・G区 積立柱建物跡 分布図 | 188 |
| Fig.117 | SD39上面 遺物写真① | 132 | Fig.171 | G区 遺構全体図① | 190 |
| Fig.118 | SD39上面 遺物写真② | 133 | Fig.172 | G区 遺構全体図② | 191 |
| Fig.119 | SD39上面 遺物写真③ | 134 | Fig.173 | SB01 遺構図 | 194 |
| Fig.120 | SD39上面 遺物写真④ | 135 | Fig.174 | SA01 遺構図 | 195 |
| Fig.121 | SD39上面 遺物写真⑤ | 136 | Fig.175 | SB01 遺構写真① | 196 |
| Fig.122 | SD39上面 遺物写真⑥ | 137 | Fig.176 | SB01 遺構写真② | 196 |
| Fig.123 | SD39上面 遺物写真⑦ | 138 | Fig.177 | SB01 遺構写真③ | 197 |
| Fig.124 | SD39上面 遺物写真⑧ | 139 | Fig.178 | SB03 遺構図 | 202 |
| Fig.125 | SD39上面 遺物写真⑨ | 140 | Fig.179 | SB03 遺構写真 | 203 |
| Fig.126 | SD39上面 遺物写真⑩ | 141 | Fig.180 | SB04 遺構図 | 204 |
| Fig.127 | SD39上面 遺物写真⑪ | 142 | Fig.181 | SB05 遺構図 | 205 |
| Fig.128 | SD39上面 遺物写真⑫ | 143 | Fig.182 | SB04 遺構写真 | 206 |
| Fig.129 | SD39上面 遺物写真⑬ | 144 | Fig.183 | SB05 遺構写真 | 206 |
| Fig.130 | SD39上面 遺物写真⑭ | 145 | Fig.184 | SB04・9 遺構写真 | 207 |
| Fig.131 | SD39上面 遺物写真⑮ | 146 | Fig.185 | SB16 遺構写真 | 207 |
| Fig.132 | SD39上面 遺物写真⑯ | 147 | Fig.186 | 總柱建物群 速景 | 208 |
| Fig.133 | SD39上面 遺物写真⑰ | 148 | Fig.187 | 總柱建物群 遺構写真 | 208 |
| Fig.134 | SD39下層出土 遺物写真 | 149 | Fig.188 | SB06 遺構図 | 209 |
| Fig.135 | SD41 全体図 | 153 | Fig.189 | SA02 遺構図 | 209 |
| Fig.136 | SD41 遺物出土状況図① | 154 | Fig.190 | SB08 遺構図 | 210 |
| Fig.137 | SD41 遺物出土状況図② | 155 | Fig.191 | SB14 遺構図 | 211 |
| Fig.138 | SD41 遺物出土状況図③ | 156 | Fig.192 | SB15 遺構図 | 211 |
| Fig.139 | SD41 遺物出土状況図④ | 157 | Fig.193 | SB10 遺構図 | 215 |
| Fig.140 | SD41 遺物実測図① | 158 | Fig.194 | SB20 遺構図 | 216 |
| Fig.141 | SD41 遺物実測図② | 159 | Fig.195 | SB10・20 遺構写真 | 217 |
| Fig.142 | SD41 遺物実測図③ | 160 | Fig.196 | SB20 遺構写真 | 217 |
| Fig.143 | SD41 遺物実測図④ | 161 | Fig.197 | SB07 遺構図 | 218 |
| Fig.144 | SD41 遺物実測図⑤ | 162 | Fig.198 | SB07 遺構写真 | 218 |
| Fig.145 | SD41 遺物実測図⑥ | 163 | Fig.199 | SB17 遺構図 | 219 |
| Fig.146 | SD41 遺物実測図⑦ | 164 | Fig.200 | SB18 遺構図 | 220 |
| Fig.147 | SD41 全景写真 | 166 | Fig.201 | SB17・18 遺構写真① | 221 |
| Fig.148 | SD41 土器出土状況写真 | 167 | Fig.202 | SB17・18 遺構写真② | 221 |
| Fig.149 | SD41 遺物集合写真 | 168 | Fig.203 | SB18 桂穴上層断面写真 | 221 |
| Fig.150 | SD41 遺物写真① | 169 | Fig.204 | SB13 遺構図 | 225 |
| Fig.151 | SD41 遺物写真② | 170 | Fig.205 | SB13 遺構写真 | 226 |
| Fig.152 | SD41 遺物写真③ | 171 | Fig.206 | SB21 遺構図 | 227 |
| Fig.153 | SD41 遺物写真④ | 172 | Fig.207 | SB22 遺構図 | 227 |
| Fig.154 | SD41 遺物写真⑤ | 173 | Fig.208 | SB21・22 遺構写真 | 228 |
| Fig.155 | SD41 遺物写真⑥ | 174 | Fig.209 | 推定群序遺構 航空写真 | 229 |

| | | | | | |
|---------|-------------------|-----|---------|-----------------------------|-----|
| Fig.210 | 推定群庁遺構 全体図 | 230 | Fig.264 | SD30 遺構写真 | 282 |
| Fig.211 | 推定群庁遺構 航空写真 | 231 | Fig.265 | G区 建物に伴わない上坑位置図 | 283 |
| Fig.212 | SB11 遺構図 | 234 | Fig.266 | G区奈良時代土坑 遺構実測図 | 284 |
| Fig.213 | SB12 遺構図 | 235 | Fig.267 | G区奈良時代土坑 遺構写真 | 285 |
| Fig.214 | SB11・12 遺構写真 | 236 | Fig.268 | 土坑遺物実測図① | |
| Fig.215 | SB11・12 柱穴写真 | 237 | | (SK449・453・458・460・478・501) | 286 |
| Fig.216 | SD32・33・SA03 遺構図 | 240 | Fig.269 | 土坑遺物実測図② (SK474) | 287 |
| Fig.217 | SD32・33・SA03 遺構写真 | 241 | Fig.270 | 上坑遺物写真① (SK449・453) | 287 |
| Fig.218 | SD33・SA03 遺構写真 | 241 | Fig.271 | 土坑遺物写真② (SK458) | 288 |
| Fig.219 | SD33南北溝部分 遺構写真 | 242 | Fig.272 | 上坑遺物写真③ (SK460) | 289 |
| Fig.220 | SD33南北溝部分 土層断面写真 | 242 | Fig.273 | 土坑遺物写真④ (SK478) | 289 |
| Fig.221 | SD32・SA03 遺構図 | 243 | Fig.274 | 土坑遺物写真⑤ (SK501) | 289 |
| Fig.222 | SD32・SA03 遺構写真 | 244 | Fig.275 | 土坑遺物写真⑥ (SK474) | 290 |
| Fig.223 | SD33・SA03 遺構図 | 245 | Fig.276 | 土坑遺物写真⑦ (SK474) | 291 |
| Fig.224 | SA03(P12) 遺構写真 | 246 | Fig.277 | 銀治関連遺物 出土遺構位置図 | 295 |
| Fig.225 | SA03 遺構写真 | 247 | Fig.278 | 銀治関連遺物 川土状況写真 (SD12) | 297 |
| Fig.226 | SA03 遺構写真 | 248 | Fig.279 | SK197 遺物実測図・写真 | 298 |
| Fig.227 | 掘立柱建物・溝出土遺物実測図① | 255 | Fig.280 | SK304 遺物実測図・写真 | 298 |
| Fig.228 | 掘立柱建物・溝出土遺物実測図② | 256 | Fig.281 | 銀治関連遺物 構成図 | 300 |
| Fig.229 | SD30 遺物実測図 | 257 | Fig.282 | 銀治関連遺物 実測図① | 304 |
| Fig.230 | SD32 遺物実測図 | 258 | Fig.283 | 銀治関連遺物 実測図② | 305 |
| Fig.231 | SD32・SD33 遺物実測図 | 259 | Fig.284 | 銀治関連遺物 実測図③ | 306 |
| Fig.232 | SD06 遺物写真① | 260 | Fig.285 | 銀治関連遺物 実測図④ | 307 |
| Fig.233 | SD06 遺物写真② | 261 | Fig.286 | 銀治関連遺物 写真① | 308 |
| Fig.234 | SD12 遺物写真 | 262 | Fig.287 | 銀治関連遺物 写真② | 309 |
| Fig.235 | SD01 遺物写真 | 262 | Fig.288 | 銀治関連遺物 写真③ | 310 |
| Fig.236 | SA01 遺物写真 | 263 | Fig.289 | 銀治関連遺物 写真④ | 311 |
| Fig.237 | SB03 遺物写真 | 263 | Fig.290 | 銀治関連遺物 写真⑤ | 312 |
| Fig.238 | SB04 遺物写真① | 263 | Fig.291 | 銀治関連遺物 写真⑥ | 313 |
| Fig.239 | SB04 遺物写真② | 264 | Fig.292 | 銀治関連遺物 写真⑦ | 314 |
| Fig.240 | SB06 遺物写真 | 264 | Fig.293 | 銀治関連遺物 写真⑧ | 315 |
| Fig.241 | SB07 遺物写真 | 264 | Fig.294 | 銀治関連遺物 写真⑨ | 316 |
| Fig.242 | SB08 遺物写真① | 265 | Fig.295 | 銀治関連遺物 写真⑩ | 317 |
| Fig.243 | SB08 遺物写真② | 266 | Fig.296 | 分析資料No.1 (遺物No.1) | 318 |
| Fig.244 | SB10 遺物写真① | 266 | Fig.297 | 分析資料No.2 (遺物No.6) | 319 |
| Fig.245 | SB10 遺物写真② | 267 | Fig.298 | 分析資料No.3 (遺物No.7) | 320 |
| Fig.246 | SB11 遺物写真 | 267 | Fig.299 | 分析資料No.4 (遺物No.8) | 321 |
| Fig.247 | SB12 遺物写真 | 267 | Fig.300 | 分析資料No.5 (遺物No.21) | 322 |
| Fig.248 | SB13 遺物写真 | 267 | Fig.301 | 分析資料No.6 (遺物No.23) | 323 |
| Fig.249 | SB17 遺物写真 | 268 | Fig.302 | 分析資料No.7 (遺物No.27) | 324 |
| Fig.250 | SB18 遺物写真 | 268 | Fig.303 | 分析資料No.8 (遺物No.29) | 325 |
| Fig.251 | SB19 遺物写真 | 268 | Fig.304 | 分析資料No.9 (遺物No.32) | 326 |
| Fig.252 | SD30 遺物写真① | 268 | Fig.305 | 分析資料No.10 (遺物No.34) | 327 |
| Fig.253 | SD30 遺物写真② | 269 | Fig.306 | 分析資料No.11 (遺物No.45) | 328 |
| Fig.254 | SD30 遺物写真③ | 270 | Fig.307 | 資料の顕微鏡組織① | 337 |
| Fig.255 | SD30 遺物写真④ | 271 | Fig.308 | 資料の顕微鏡組織② | 337 |
| Fig.256 | SD32 遺物写真① | 271 | Fig.309 | 資料の顕微鏡組織③ | 338 |
| Fig.257 | SD32 遺物写真② | 272 | Fig.310 | 資料の顕微鏡組織④ | 338 |
| Fig.258 | SD32 遺物写真③ | 273 | Fig.311 | 資料の顕微鏡組織⑤ | 339 |
| Fig.259 | SD32 遺物写真④ | 274 | Fig.312 | 資料の顕微鏡組織⑥ | 339 |
| Fig.260 | SD32 遺物写真⑤ | 275 | Fig.313 | 資料の顕微鏡組織⑦ | 340 |
| Fig.261 | SD32 遺物写真⑥ | 276 | Fig.314 | 資料の顕微鏡組織⑧ | 341 |
| Fig.262 | SD32 遺物写真⑦ | 277 | Fig.315 | 資料の顕微鏡組織⑨ | 341 |
| Fig.263 | SD33・SA03 遺物写真 | 278 | Fig.316 | 資料の顕微鏡組織⑩ | 342 |

| | | | |
|--|-----|-------------------------------------|-----|
| Fig.317 出土鉄滓類の全鉄量(T.Fe) -酸化チタン(TiO_2)量分布図 | 342 | Fig.333 推定都府道構と周辺の状況 | 365 |
| Fig.318 製鍊滓と鍛冶滓の分類 | 343 | Fig.334 I丹石州街道の方位と浅堀道路の 建物主軸方位 | 366 |
| Fig.319 砂鐵系と鍛冶滓と鉱石系製鍊岸 の分類 | 343 | Fig.335 縦柱建物SB13の推定復元 | 367 |
| Fig.320 K/Ca-Rb/Sr分布図による胎土 の产地 | 344 | Fig.336 高床倉庫群の建物群 | 367 |
| Fig.321 出土炉壁および羽口のゼーゲ ルコーン溶剤温度 | 344 | Fig.337 高床倉庫群の推定復元 | 367 |
| Fig.322 山雲国全城と神門郡の位置 | 345 | Fig.338 建物の平面駆模分布図 | 368 |
| Fig.323 出雲國の構成図 | 346 | Fig.339 SB10とSB20の推定復元 | 369 |
| Fig.324 神門郡家の推定所在地 | 349 | Fig.340 長舟側柱建物SB18 | 369 |
| Fig.325 天神跡の建物遺構と出土遺物 | 351 | Fig.341 陶器付赤色顔料 蛍光X線分析結果 | 371 |
| Fig.326 戸祭氏による路路推定図 | 353 | Fig.342 SK474陶器表面と赤色顔料付着状況 | 371 |
| Fig.327 「古志町誌」掲載の路路推定図 | 353 | Fig.343 F・G・山土 定形規と転用規 | 372 |
| Fig.328 神戸川と周辺の遺跡 | 354 | Fig.344 F・G・区出土文字資料・特殊遺物 | 373 |
| Fig.329 遺構の主軸方位区分図 | 359 | Fig.345 山志本郷遺跡 その他調査区の文字 資料・特殊遺物 | 373 |
| Fig.330 郡庁遺構の類例(1) | 362 | Fig.346 周辺調査区 8~9世紀の主な 調査成果 | 375 |
| Fig.331 郡守遺構の類例(2) | 363 | Fig.347 小山遺跡出土 文字資料 | 376 |
| Fig.332 推定郡守遺構の範囲と第11次 調査区の位置関係 | 364 | Fig.348 一田谷I 遺跡の遺構と遺物 | 377 |
| | | Fig.349 「出雲國風土記」による神門郡内の里程 | 378 |
| | | Fig.350 山志本郷遺跡F・G区の主要な調査成果 | 382 |

表 目 次

| | | | |
|---------------------------------------|-----|----------------------------------|-----|
| Tab. 1 古志本郷遺跡の発掘調査歴 | 7 | Tab.28 SD12 出土遺物観察表 | 251 |
| Tab. 2 山志本郷遺跡F・G区 時代別の主要な遺構 | 13 | Tab.29 SB01 山土遺物観察表 | 252 |
| Tab. 3 本書の構成と主な内容 | 13 | Tab.30 SA01 出土遺物観察表 | 252 |
| Tab. 4 山志本郷遺跡F・G・区 時期別の 主要な調査成果一覧表 | 16 | Tab.31 SB03 出土遺物観察表 | 252 |
| Tab. 5 包含層出土上遺物 破片点数集計表 | 21 | Tab.32 SB04 山土遺物観察表 | 252 |
| Tab. 6 包含層出土遺物 重量集計表 | 21 | Tab.33 SB07 山上遺物観察表 | 252 |
| Tab. 7 包含層出土遺物観察表 | 25 | Tab.34 SB08 出土遺物観察表 | 252 |
| Tab. 8 F・G・山土出土 遺物観察表 | 53 | Tab.35 SB10 出土遺物観察表 | 252 |
| Tab. 9 F・G・SK176出土遺物観察表 | 53 | Tab.36 SB12 出土遺物観察表 | 252 |
| Tab. 10 F区中近世墓 一覧表 | 66 | Tab.37 SD30 山上遺物観察表 | 253 |
| Tab. 11 F区中近世墓出土遺物観察表 | 84 | Tab.38 SD32 出土遺物観察表 | 253 |
| Tab. 12 F区土坑川土 遺物観察表 | 90 | Tab.39 SD33 出土遺物観察表 | 254 |
| Tab. 13 F区溝出土 遺物観察表 | 90 | Tab.40 G区土坑川土遺物 観察表 | 281 |
| Tab. 14 G区溝跡 時期検討表 | 98 | Tab.41 山志本郷遺跡 鍛冶関連遺物 分析データ解析表 | 296 |
| Tab. 15 G区溝跡 一覧表 | 99 | Tab.42 鍛冶関連遺物出土遺構 ・遺物内容一覧表 | 299 |
| Tab. 16 SD39上層出土遺物集計表 | 103 | Tab.43 鍛冶関連遺物 一般観察表① | 301 |
| Tab. 17 SD39 山土遺物観察表① | 129 | Tab.44 鍛冶関連遺物 一般観察表② | 302 |
| Tab. 18 SD39 出土遺物観察表② | 130 | Tab.45 鍛冶関連遺物 一般観察表③ | 303 |
| Tab. 19 SD39 出土遺物観察表③ | 131 | Tab.46 調査資料と調査項目 | 335 |
| Tab. 20 SD39 出土遺物観察表④ | 132 | Tab.47 山志本郷遺跡山土鉄滓 の化学成分分析結果 | 336 |
| Tab. 21 SD41 出土遺物観察表① | 165 | Tab.48 胎土中の特定元素の存在比 | 336 |
| Tab. 22 SD41 出土遺物観察表② | 166 | Tab.49 X線回折結果 | 336 |
| Tab. 23 SB01 出土遺物観察表 | 177 | Tab.50 胎土中の特定元素の存在比 | 336 |
| Tab. 24 SD29・SD34 出土遺物観察表 | 183 | Tab.51 出土遺物の年代一覧表 | 358 |
| Tab. 25 SD42 山土遺物観察表 | 183 | Tab.52 F・G・H区官衙関連遺構 一覧表 | 360 |
| Tab. 26 F・G区 官衙関連遺構 一覧表 | 187 | Tab.53 陶器付赤色顔料 組成成分比 | 370 |
| Tab. 27 SD06 出土遺物観察表 | 251 | | |

第1章

古志本郷遺跡の 位置と環境

章『藻

〇〇朝貴瀬本志古
御賀又置立

第1章 古志本郷遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置

古志本郷遺跡は島根県出雲市古志町に所在する。遺跡のある出雲平野は、北を鳥根半島北山山系、南を中国山地、西を日本海、東を宍道湖にそれぞれ囲まれた東西約20km、南北約5kmの県内最大の平野で、有数の穀倉地帯として知られる。遺跡が位置するのは出雲平野のなかでも南西端、中国山地から派生した丘陵のごく近くである。JR出雲市駅からは神戸川を隔て、直線距離で南西に約2kmの距離にある。

2. 遺跡の地質的基盤

中国山地に流れを発する神戸川は、山間部を北流して出雲平野南西部に達する。平野部に向かって川が開けたあたり、川の左岸に遺跡が位置している。古志本郷遺跡の遺構面は標高8~10m前後にあり、この神戸川の形成した自然堤防上と、その背後に残された後背湿地面に営まれている。

遺跡所在地を含む出雲平野のほとんどは縄文時代の海進期には海域であったが、縄文後・晚期以降の海退と、三瓶山の噴火活動、2大河川である斐伊川・神戸川の沖積作用などによって平野が形成されていく。

特に縄文時代後期の三瓶山の噴火活動は地形の変化に影響が大きく、その火碎物が火山泥流や洪水流によって神戸川下流域に運ばれ、その結果古志本郷遺跡の一帯は3m以上の厚さをもつ堆積物によって覆われたとされる⁽¹⁾。その後流路が固定した弥生時代以降、安定化した微高地に集落が営まれるようになった。上記の地質的背景のため、古志本郷遺跡の各種遺構はいずれも三瓶山噴出物に由来するディサイト質の浅黄灰色砂からなる地盤上に掘り込まれている⁽²⁾。

第2節 歴史的環境

以下では古志本郷遺跡を中心とする周辺地域、主に出雲平野の遺跡の概要を各時代について述べる。なお文中の（数字）はFig. 2の番号と対応している。

1. 縄文時代

出雲平野における最も古い時期の遺跡としては、平野の北西端に位置する菱根遺跡（13）、平野西部の砂丘下にある上長浜貝塚（14）が縄文時代早期末の遺跡として知られる。続く前期末～中期では遺跡数が少なく、斐川町上ヶ谷遺跡が知られるにすぎない。

古志本郷遺跡が位置する平野南部では、やや時代が下って中期の船元IV式や里木II式の土器が出土した三田谷Ⅲ遺跡が現在のところ初現期の例である。神戸川が平野に向かって開けるこの三田谷の谷筋に面した地域は後期以降に安定した集落が形成し、同じ谷筋の三



Fig. 1 古志本郷遺跡の位置

(1) 中村唯史2001「立地地盤の形成について」『古志本郷遺跡Ⅱ』島根県教育委員会

(2) 島根県立三瓶自然館 指導員 中村唯史氏の御教示による。

田谷I遺跡（43）からは後期の福田K2式併行の上器群や四元式、晚期の八日市新保式や岩田第四類の土器が多く出土したほか、三瓶山の火碎流によって埋没した丸木舟が出土している。海退の進む後・晚期には、それまで遺跡のなかった地域に新たな集落の出現が認められ、神戸川流域の平野中央部でも善行寺遺跡で晚期の上器が出土している。また平野の南西部、現在の神西湖南岸では御領田遺跡（21）、三部八幡下遺跡が知られる。また平野北西部では出雲人社境内遺跡（9）で晚期の土器が出土している。

このように周辺地域ではいくつかの遺跡が知られているが、古志本郷遺跡を含む古志遺跡群（下古志遺跡・田畠遺跡）では現在のところ縄文時代の遺物は出土していない。

2. 弥生時代

前期の遺跡としては、浅柄遺跡、三田谷I遺跡などのような谷筋低地に位置する遺跡で縄文後・晚期から継続する例があるほか、新たに平野中央部でも遺跡の展開が認められ、中期以降に中心集落となる矢野遺跡（23）や蔵小路西遺跡（26）でもわずかながら前期末の遺物が出土している。古志遺跡群では、古志本郷遺跡で前期の土器を含む溝が確認されており、わずかながら居住の痕跡をうかがわせるものの、集落が展開するのはさらに遅るものと見られる。

中期中葉以降は集落の分布が微高地に広く展開し、環濠とも考えられる大溝が集落を区画する天神遺跡（32）や下古志遺跡（2）、田畠遺跡（3）などの広範囲にまとまった大規模な集落遺跡がみられる。古志遺跡群での集落の開始も中期以降である。その他には白枝荒神遺跡（28）、知井宮多聞院遺跡（15）、海上遺跡（33）などが知られる。

後期になって居住が開始する集落も多く、平野内一円に遺跡の分布が広がっていく。小山遺跡（24）、中野美保遺跡（29）や姫原西遺跡（25）など、沖積地上にも集落が営まれる。

墳墓については、後期後葉に傑出した規模・外表施設・埋葬施設をもつ四隅突出型墳丘墓

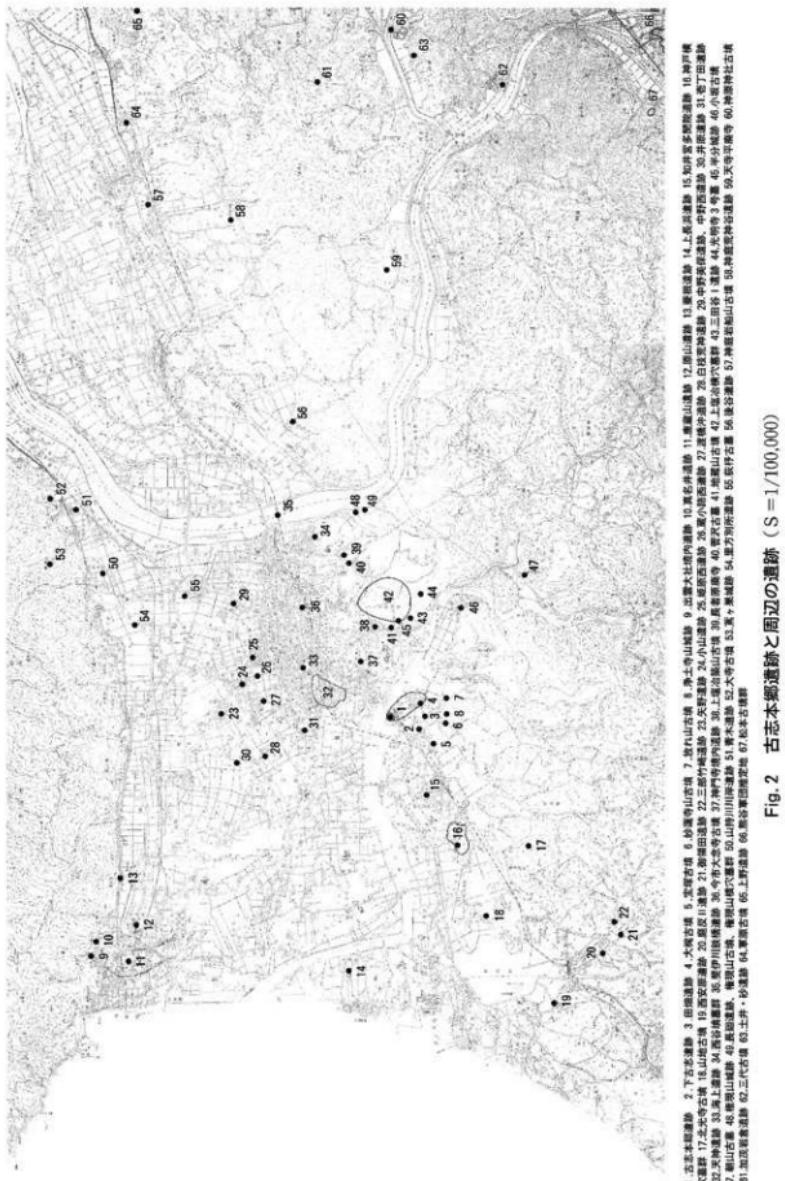
が築かれた西谷墳墓群（31）が出現する。同墳丘墓の立地は丘陵上に限られると考えられてきたが、近年の調査で平野低地にも同時期に築かれていたことが中野美保遺跡（29）や青木遺跡（51）で確認されている。他に三田谷I遺跡では方形周溝墓が調査された。

3. 古墳時代

古志本郷遺跡とともに古志遺跡群を形成する下古志遺跡（2）や田畠遺跡（3）では溝跡から弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての上器が多量に出土している。また白枝荒神遺跡（28）や姫原西遺跡（26）、天神遺跡（32）でもやはり同時期の遺物が多く出土している。これらの遺跡では溝などへの上器廃棄を境に、それ以後集落が衰退・断絶する傾向があり、調査例でみるとかぎり出雲平野での遺跡数はその後少なくなる。古墳時代中期～後期の生活遺跡としては、斐伊川鉄橋遺跡（35）や石土手遺跡、浅柄遺跡などがわずかに知られるにすぎない。

墳墓についてみると、前代の四隅突出型墳丘墓は築かれなくなり、古墳時代前期には卓越した規模をもつ首長墳はまったくみられない。出雲平野周辺で定型化した前方後円墳は前期末と考えられる大寺1号墳（52）（墳長50m）が初現で、平野南部では前後に遡る前方後円（方）墳は築かれていません。その他に調査された前期古墳としては、筒形銅器などが出土した前期末の山地古墳（18）（円墳、墳径24m）や、立地や墓域規模などから前期とみられる権現山古墳（49）などがある。

出雲東部では、中期に六道湖沿岸・大橋川流域の各地で新たな首長墳系列の出現がみられる一方、出雲平野を中心とした出雲西部ではそのような現象は顕著でない。平野東部に軍原古墳（64）（円墳、墳径30m）や神庭岩船古墳（前方後円墳、墳長48m）などが知られるのみである。古志本郷遺跡の近くでは、箱式石棺を埋葬施設にもつ池田古墳や西谷15・16号墳などが調査によって明らかになっている。正確な時期は不明だが、古志本郷遺跡と同じ平野南西部にある北光寺古墳（17）は丘陵尾根上に築かれた墳長65mの大型前方後円



墳で、中期古墳の可能性が指摘されている。前期～中期のものとすれば出雲西部でトップクラスの首長墓ということになろう。

古墳時代後期になると、山雲最大の前方後円墳である今市人念寺古墳（36）（墳長91m）の築造を契機に、古墳の動向はそれ以前の様相と一変する。上塩治桑山古墳（38）、地蔵山古墳（41）と神戸川流域に卓越した規模と内容をもつ首長墳が継続して築かれ、出雲を東西に二分する有力首長の存在をうかがわせる。これらの墓域は神戸川の右岸に位置するが、川をはさんだ左岸にも妙蓮寺山古墳（6）、放れ山古墳（7）、大槻古墳（4）と右岸の首長の造営に対応して、ひとまわり小さい石室規模をもつ首長墳が連続して築かれる。また墳丘が削平され内容は不明であるが、古志本郷遺跡の周辺では天神原古墳の存在が知られている。これらと古志本郷遺跡は至近距離にあり、古墳時代の首長本貫地と官衙成立の関連性をうかがわせる。

古墳時代後期後葉以降は、横穴墓の造営が盛んにおこなわれる。神戸川右岸には180穴以上が密集する上塩治横穴墓群（42）があるほか、左岸にも神門横穴墓群（16）、地蔵堂横穴墓群などの大規模な横穴墓群が営まれる。

4. 奈良・平安時代

周辺地域では官衙との関連を指摘されている遺跡がいくつか点在する。大型の掘立柱建物跡が確認され、あわせて縁判陶器や墨書き器が出土した天神遺跡（32）は神門郡家に比定する意見もある。また近年の調査で多数の木簡・墨書き器などが出土した三田谷Ⅰ遺跡（43）は、神門郡内の異なる郡名を記した木簡が数点出土しており、郡全体の管理に関わる郡衙山先機関などの可能性が指摘されている。斐伊川を隔てた旧山雲郡では、正倉とみられる總社礎石建物群が確認され山雲郡家所在地の可能性が高いとみられる後谷Ⅴ遺跡（56）が著名である。

また、近半の調査で火葬骨を納めた石櫃がみつかった光明寺3号墓（44）のほか、周辺には小坂古墳（46）、朝山古墳（47）、曾沢古墳（40）など石製骨器を納めた墓が集中し

ており、火葬が早く受容され地方有力氏族、官人層に採用された地域として注目される。

寺院跡としては、『出雲國風土記』記載の新造院に比定される神門寺境内廃寺（37）や長者原廃寺（39）が知られている。

集落としては良好な調査例が少ないが、藤ヶ森南遺跡、角田遺跡、甲方八石原遺跡、高浜Ⅱ遺跡などがある。

なお、奈良時代の周辺地域における官衙関連遺跡および山雲國風土記記載との関連については、本書第10章で考察を加えている。

5. 鐘倉時代以降

中世の遺跡としては、総柱の掘立柱建物が確認された渡橋沖遺跡（27）のほか、幅4mの濠や建物跡、12～15世紀の遺物が多数みつかった歳小路西遺跡（26）などがある。後者は国人領主朝山氏の館跡と推定されている。また、矢野遺跡（23）では溝で区画された14～15世紀の屋敷地が調査されている。

寺院関連では般若寺との関連が指摘される大井谷Ⅱ遺跡で13～15世紀の閑座・輸入陶磁器が多数出土した。埋葬関連では、国の重要文化財に指定された青磁碗が副葬されていたことで知られる萩籽古墓（55）や、近年良好な遺存状態で調査された姫原西遺跡（25）の木棺墓などがある。

古志町周辺についてみれば、飛鳥時代には下古志町の南部丘陵に古志氏の居城である淨土寺山城、栗栖城が、また平野部には古志氏の居館が築かれ、旧山陰道沿いにはその市場町が形成された。その後近世になり、元禄年間には松江藩による治水・灌漑事業により十間川の開削がおこなわれ、新田開発が盛んにおこなわれた。その結果、新たな耕地が得られ穀倉地帯になるとともに、道の整備や集落の拡大、商工業の発展といった波及効果を生み、街道沿いに発展をみせた。石州・備後街道に通じる道路交通・水運の要衝であったこともその背景として大きな役割を担った。

【参考文献】『古志町誌』出雲市古志町住民協議委員会1990

第2章

調査の経緯と経過

章 1
議

日本古事記の研究

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

1. 斐伊川放水路事業の概要

斐伊川の治水事業は大正11(1922)年より行われてきたが、昭和に入って相次ぐ洪水に悩まされ、とりわけ昭和47(1972)年の豪雨では斐伊川・神戸川の両河川は破堤寸前に陥り、また宍道湖の増水により松江市をはじめとする約70haが1週間以上にわたって浸水するという被害を受けた。このため、斐伊川・神戸川の抜本的な治水計画を樹立するため、両水系を一体化した高水処理計画が立てられた。

斐伊川放水路事業は、斐伊川の計画高水量の一部を中流左岸の出雲市大津町来原付近から新たに放水路を開削して分流し、山陰市塙治町半分付近において神戸川に合流させるものである。また、それにより神戸川下流域は、神戸川の自己流量と斐伊川からの分流量をあわせた計両水流量をもつ斐伊川放水路として、必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。その規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及ぶ。この計画は、斐伊川流水の一部を早く、しかも安全に日本海に流すことを目的としたもので、島根県が昭和44(1969)年に基本構想を発表、同50(1975)年に基本計画を策定し、建設省(現国土交通省)が同51(1976)年に確定したものである。ルートは同54(1979)年に最終決定された。

2. 埋蔵文化財の取り扱い

こうした事業計画の推進・決定のなか、島根県教育委員会は昭和50年度に島根県企画部の依頼を受けて、分流地域の分布調査を実施し、その結果を昭和51年3月に「斐伊川放水路建設予定地埋蔵文化財分布調査報告」としてまとめて報告した。また、昭和53・54年度には、建設省出雲工事事務所から委託を受けて、上塙治町を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在する遺跡を対象としながら、

一部発掘調査を含んだ分布調査を行い、この結果をもとに昭和55(1980)年3月に『出雲・上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』を刊行した。

その後事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川治水対策課および島根県教育庁文化課の三者で協議が進められ、平成3(1991)年1月には文化課が再度分布調査を実施した。そして、同年度末には同事務所と文化課の間に協議文書が交わされ、事前に予定地内にある埋蔵文化財を発掘調査することが決定した。

3. 発掘調査の期間

事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査は平成3(1991)年4月に開始し、平成13(2001)年12月にはすべての現地調査が終了した。この間に調査された遺跡は、島根県教育委員会34遺跡、出雲市教育委員会14遺跡、計48遺跡にも及ぶ。

そのうち古志本郷遺跡については平成6(1994)年12月にトレンチ調査に着手、翌平成7(1995)年5月から平成13(2001)年10月まで、継続して発掘調査を実施した。その成果については調査区・調査年次ごとに便宜上分割して報告書を刊行しており、古志本郷遺跡の報告書は本報告を含めて計6冊からなる。

本報告に掲載したF区・G区は神戸川の拡幅により新たな堤防と側道が建設される範囲にあたり、平成10・11年度に発掘調査を実施した。調査面積はF区3,134m²、G区4,953m²である。

なお平成14年度の報告書作成をもって、斐伊川放水路建設に伴うすべての発掘調査事業が終了した。

第2節 古志本郷遺跡 既往の調査歴

古志本郷遺跡は以前より周知の遺跡であり、昭和62年の第1次調査が行われてから平成13年にいたるまで、数次にわたって発掘調査が実施された（Tab. 1）。以下では調査年次に従い成果の概要を述べる。

1. 出雲市教委による調査

昭和62年度に第1次の発掘調査が行われた【文献1】。遺跡の範囲確認を目的に6か所のトレンチが設定され、弥生時代中期中葉～終末期の遺物が出土した。特に第3トレンチでは竪穴建物跡と、それに伴う100個体以上の土器が出土している【文献1・4】。

その後は斐伊川放水路建設事業に伴う道路改修や公民館の移転に先立って調査が行われている。第2次調査は古志公民館建設に伴う調査で、平成2年度に実施された。弥生時代中期後葉の竪穴建物跡3棟と溝のほか、近世に至る多くの遺構が確認されている【文献2】。同時に緑色凝灰岩、碧玉などの長作石材が出土したことから、遺跡内で玉作が行われていた可能性が指摘されている。

平成5・7年度に行われた第3次・第4次の調査は畠地造成・土地改良事業に伴うもので、奈良・平安時代を中心に若干の遺物が出土しているものの、目立った遺構は確認されていない【文献3・5】。これらの地点は遺跡の中心部から外れた縁辺部に位置するとみられ、これによって遺跡群東側の広がりが把握された。

平成8年度に市道の改良工事に先立って行われた第6次調査では、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の大溝が確認された【文献4】。

2. 島根県教委による調査

平成7年度以降は、島根県教委により広範囲の発掘調査が実施された。

まず平成7～9年度の3か年にわたり、県道多伎江南出雲線の付けかえに先立ってA B C D E区の調査が行われた⁽¹⁾【文献6】。A・B区では中世後期～近世の建物跡10棟、井戸跡4基、大溝のほか、近世を中心とした土坑多数が確認されている。C区では古墳時代初頭の土器を多量に包含する大溝2条、古代～中世の掘立柱建物跡8棟、井戸跡4基、近世を中心とした土坑群など多数の遺構が確認された。D区では弥生時代後期初頭の竪穴建物跡2棟と同時期の溝、中近世の井戸跡が、E区では弥生時代中期末～後期初頭の竪穴建物跡4棟と古墳時代前期の建物跡4棟のほか中世を中心とした掘立柱建物跡6棟が確認された。

その後、平成10～13年度の4か年間は、神戸川の拡幅部にあたるF G H I J Kの各区域の調査が行われた。

H区からは弥生時代前期の溝、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の上器を含む溝跡、弥生時代終末の竪穴建物跡、古墳時代終末～奈良時代の溝跡、古代～近世の井戸跡、古代～近世の掘立柱建物跡と多数の土坑群が確認された【文献7】。

I区では、朝鮮半島産の瓦質土器を含む弥生時代後期～古墳時代前期の多量の土器が出土した溝跡、古墳時代後期以降の掘立柱建物跡、中近世の溝跡・井戸跡・土坑墓などが確認された【文献8】。また県道の路面下となっていたI区と先述H区の間については、平成13年度に調査を実施している【文献9】。

J区では弥生時代後期前葉の溝跡、弥生時代後期～終末期の竪穴建物跡、古代～中世の井戸跡、奈良・平安時代の掘立柱建物跡、中近世の土坑・溝跡などが確認されている。

K区では集落の境界を区画すると見られる溝構造が確認され、埋土中から弥生時代中期～古墳時代前期に至る多数の土器が出土している。

斐伊川放水路建設に伴う発掘調査は以上で

(1) 本調査に先立つ平成6年12月には、遺跡範囲確認のためのトレンチ調査が実施されている。

あるが、このほかに平成11年度に出雲市教委により隣接地の調査（第11次）が行われている【文献10】。本書掲載のG区で神門郡家（郡衙）に属すると推定される大型建物跡（G区SB11、SB12）が確認されたことを受

けて、この建物の範囲確認を目的としたものである。調査面積が小さく断定はできないが、柱穴と推定される土坑を確認しており、大型建物跡の広がりを推定する資料を得ている。

Tab. 1 古志本郷遺跡の発掘調査歴

| 調査年度 | 調査次数 | 調査区域 | 調査主体 | 調査原因 | 主な内容 | 文献 |
|------|------|-------------------|----------|-----------|--|----|
| 昭和62 | 第1次 | 1T～6T | 出雲市教委 | 遺跡分布調査 | 弥生時代中期の竪穴建物跡と土器 | 1 |
| 平成2 | 第2次 | | 出雲市教委 | 古志公民館移転建築 | 弥生時代中期後葉頃の竪穴建物跡3基、玉作石材が出土。 | 2 |
| 平成5 | 第3次 | | 出雲市教委 | 畠地造成 | 遺構・遺物少なく、遺跡の縁辺部と推定された。 | 3 |
| 平成7 | 第4次 | | 出雲市教委 | 土地改良総合事業 | 奈良・平安時代を中心に、弥生時代中期～近世の遺物が出土したが、遺構・遺物の総量は少ない。 | 5 |
| 平成7 | 第6次 | A・B・C区 | 出雲市教委 | 市道本郷新宮線建設 | 古墳時代の大溝 | 4 |
| 平成7 | 第5次 | A・B区 | 島根県教委 | 斐伊川放水路建設 | 弥生時代の竪穴建物跡、古墳時代の大溝、古代～近世の建物跡・井戸跡 | 6 |
| 平成8 | 第7次 | A・C区 | 斐伊川放水路建設 | 斐伊川放水路建設 | 弥生時代の竪穴建物跡、古墳時代後期の土器溜まり、奈良時代の郡家関連建物群、近世の土坑 | |
| 平成9 | 第8次 | C・D・E区 | 斐伊川放水路建設 | 斐伊川放水路建設 | 弥生時代後期の竪穴建物跡、古代～近世の建物跡 | |
| 平成10 | 第9次 | F・G区 (本書掲載) | 島根県教委 | 斐伊川放水路建設 | 古墳時代前期の溝、古墳時代後期の土器溜まり、奈良時代の郡家関連建物群、近世の土坑 | 11 |
| 平成11 | 第10次 | H・J区 | 島根県教委 | 斐伊川放水路建設 | 弥生時代後期の竪穴建物跡、古代～近世の建物跡 | 7 |
| | | I区 | 島根県教委 | 斐伊川放水路建設 | 弥生時代後期～古墳時代前期の溝など | 8 |
| 平成11 | 第12次 | K区 | 島根県教委 | 斐伊川放水路建設 | 弥生時代中期～古墳時代前期の溝、溝中から多量の土器出土 | 12 |
| 平成12 | | | | | | |
| 平成11 | 第11次 | | 出雲市教委 | 範囲確認 | 神門郡家郡庁建物の一部と推定される柱跡を確認。 | 10 |
| 平成13 | 第13次 | II区とI区 の間(県道下) | 島根県教委 | 斐伊川放水路建設 | 古墳時代前期の溝、中世の溝ほか | 9 |

【文献】

1. 出雲市教育委員会1988『古志地区分布調査報告書』
2. 出雲市教育委員会1994『出雲市埋蔵文化財調査報告』第4集
3. 出雲市教育委員会1995『出雲市埋蔵文化財調査報告』第5集
4. 出雲市教育委員会1998『市道本郷新宮道改良工事に伴う古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』
5. 出雲市教育委員会1999『古志地区土地改良総合事業地内古志本郷遺跡』
6. 島根県教育委員会1999『古志本郷遺跡Ⅰ』斐伊川放水路建設予定期地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI
7. 島根県教育委員会2001『古志本郷遺跡Ⅱ』斐伊川放水路建設予定期地内埋蔵文化財発掘調査報告書X I
8. 島根県教育委員会2001『豊谷遺跡・上沢Ⅲ遺跡』斐伊川放水路建設予定期地内埋蔵文化財発掘調査報告書X II
9. 島根県教育委員会2002『古志本郷遺跡IV・放水路(横六基群)・只谷間付・上沢Ⅲ遺跡(分析編)』斐伊川放水路建設予定期地内埋蔵文化財発掘調査報告書X IV
10. 出雲市教育委員会2002『古志本郷遺跡・下古志遺跡』平成11年度古志遺跡範囲確認調査報告書
11. 島根県教育委員会2003『古志本郷遺跡V』斐伊川放水路建設予定期地内埋蔵文化財発掘調査報告書X VI
12. 島根県教育委員会2003『古志本郷遺跡VI』斐伊川放水路建設予定期地内埋蔵文化財発掘調査報告書X VII

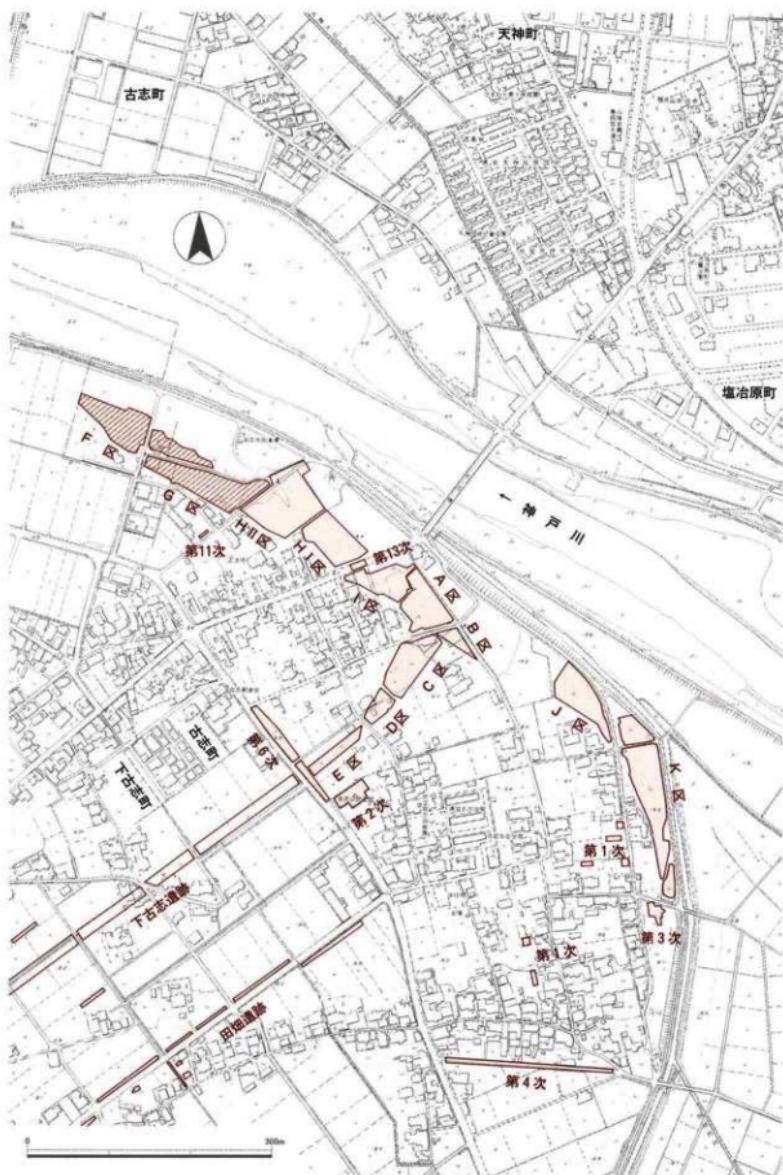


Fig. 3 古志本郷遺跡全体図 (S = 1/6,000)

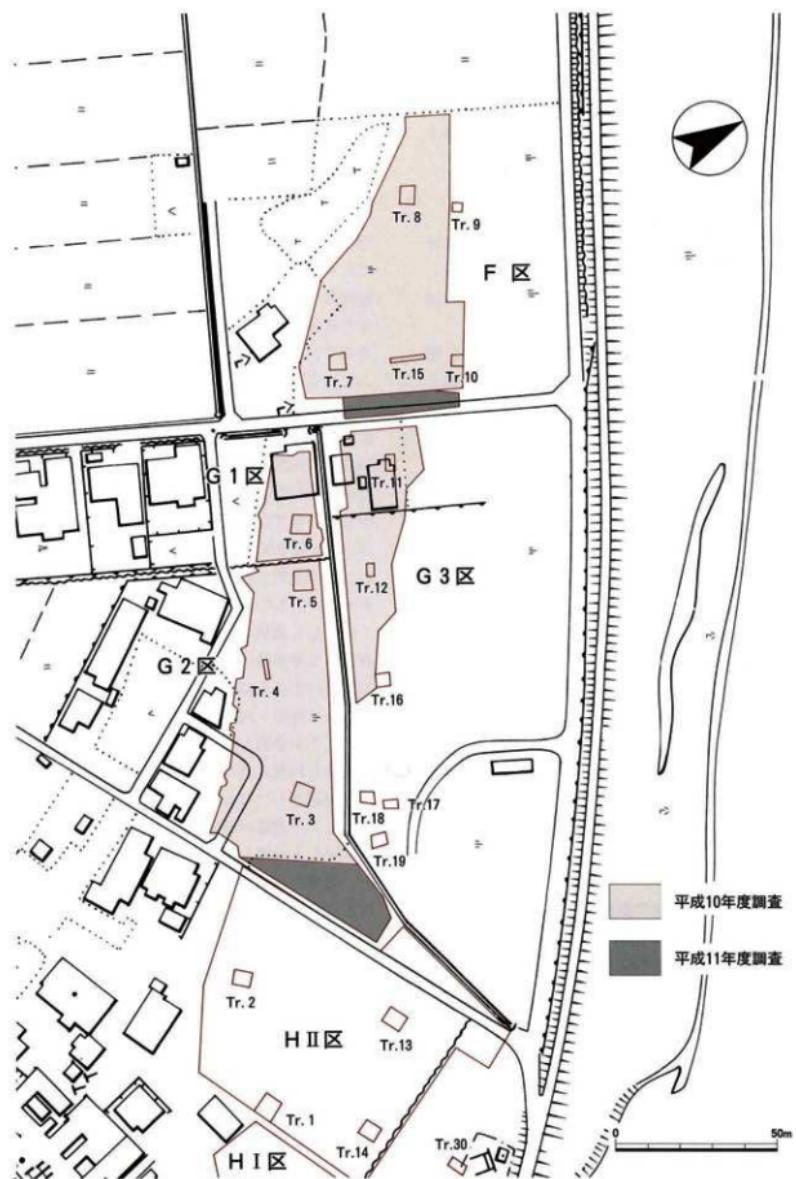


Fig. 4 調査区配置図 (F・G区) (S=1/1,500)

第3節 調査の経過

本報告に掲載するF区・G区の発掘調査は平成9年度に試掘調査、続いて平成10年度と11年度に本調査を実施している。以下では主な経過について述べる。

1. 平成9年度の調査（試掘調査）

遺跡の範囲を確認するため試掘調査を実施した。設定したトレンチの数はF区に5か所、G区に8カ所である（Fig. 4）。（なおTr.18とTr.19は10年度調査）

試掘対象となった一帯は近年まで水田、畑作の耕作地であった。したがって近世以降の耕作や土地区画整理事業によりそれ以前の地表面は大きく削られている。また耕作土等の中には水田面を除けば遺構面は存在しない。さらに耕作土の直下には灰白色砂が厚さ数mにわたり堆積している。この灰白色砂は繩文後期に起きた三瓶山の噴火火砕物に由来するもので、この中に遺物は全く含まれない。したがって、確認しうる遺構残存面は灰白色砂層の上面のみであった。

この灰白色砂層の上面は神戸川に近くなるほど急激に下がっている。最も川寄りのTr.9とTr.10では遺構・遺物ともに全く出土しなかった。一方、微高地により近い南側のトレンチ4か所では、溝跡・柱跡と推定される土坑列など遺構の存在が確認された（Tr.4, 5, 6, 7）。これらの結果を受けて、本調査の対象となる範囲が決定された。

2. 平成10年度の調査

平成10年度の調査面積は7,356m²である。現地での作業は平成10年4月20日に着手した。耕上処理などの都合により、まずF区の西半から取りかかり、徐々に東と南へ掘り広げる方法をとった。F区西半は近世以降の水田耕作によって深く掘り下げられていたために古い遺構は全く残されていなかったが、F区南側縁辺からは弥生時代後期の土器が、東半あるいは南側縁辺では奈良時代と中世を中心とした比較的古い遺構が良好に残されていた。

F区とG区を区切る市道は生活道路として

確保するため平成11年度に繰り越すこととして、F区と併行して8月4日からは市道東側のG1区の調査を、さらに8月20日からはG2区の調査をおこなった。その後9月中旬にかけての遺構精査によって、掘立柱建物跡や溝跡が多数確認され、また硯など文字闇連遺物も出土したことから遺跡の性格が注目されることになった。G3区は試掘調査の結果、遺構は完全に削り取られて残存しないと考えており、当初調査対象外としていた。しかし建物群の柱穴は掘り込みが非常に深いため、その底部がわずかでも遺存している可能性を考えて急きょ調査を行うことになった。

これらの成果について調査指導会を実施したところ、F・G区で確認された建物群が宮衙に開闢することが指摘され、特に本遺跡が所在する出雲国神門郡の郡家（郡衙）にあたる可能性が高いと判断された。こうした成果、所見について10月12日に報道発表、また10月18日には現地説明会を開催し、一般公開を行った。現地説明会は台風の直撃を受けた翌日であったが、200人余りの多数の参加をみた。

出土した遺構の重要性から、県教委と建設省出雲工事事務所（当時）は工法変更を含めて保存の方法を協議したが、遺構を全て保存するには堤防・河川敷を計画より大幅に広く取ることが必要となるため、現状での保存は不可能と判断された。遺構の大半は新たな堤防と側道の下になるため、次善の方法として工事により遺構が破壊されないように慎重な埋め戻しと被覆上を施した上で工事を行うこと、遺構表示や説明板の設置など整備・活用の方法を検討していくことなどを申し合わせた。

平成10年度の調査は12月18日をもって終了し、遺構には保護のために周辺の土砂と明確に区別される黒色の細かい石粒（採石ダスト）を手作業で詰めた。さらに調査区全体を同様の石粒で厚さ50cm以上被覆して保護した。

3. 平成11年度の調査

市道のため調査のできなかったF区とG区の間の部分（F7区）と、G区とH区の間の部分（G2区東端部）の2か所について調査

【読売新聞】



【毎日新聞】



【山陰中央新報】

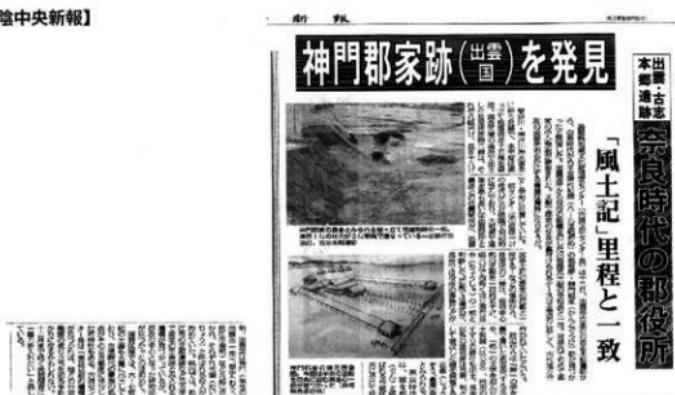


Fig. 5 新聞報道記事 (平成10年10月13日付)

第3章

調査成果の概要と
本書の構成

章6 痛

3.要點の果ぬ査臨
ぬ薦の書本

第3章 調査成果の概要と本書の構成

第1節 調査成果の概要

1. 調査区の概況

本書に掲載したF・G区の調査面積は、F

区が $3,134\text{m}^2$ ($3,000\text{m}^2$)、G区が $4,953\text{m}^2$ ($4,455\text{m}^2$)で、合計で $8,087\text{m}^2$ ($7,455\text{m}^2$) であった⁽¹⁾。なおG区は調査の便宜上、G1区～G3区の3つに分かれている。

Tab. 2 古志本郷遺跡F・G区 時代別的主要な遺構

| | 柱立柱建物跡(SB) | 柵列(SA) | 溝跡(SD) | 土坑(SK) | 井戸跡(SE) |
|----|------------|--------|--------|--------|---------|
| F区 | 1 | 1 | 20 | 約350 | 1 |
| G区 | 19 | 2 | 13 | 108 | |
| 合計 | 20 | 3 | 33 | 約458 | 1 |

2. 調査成果の概要

F・G区で確認した遺構のうち、主要なもの数は上記Tab. 2 のとおりである。

調査成果のなかで特筆される点としては下記の内容があげられる。

- 弥生時代前期の遺物が遺構に伴って出土した点。田畠遺跡、下古志遺跡を含めた古志遺跡群では中期中葉以降に遺構の増加が認められるが、それ以前の前期においてもわずかながら活動の痕跡が認められた。

- 古墳時代前期前葉の土器が多量に廃棄された溝が確認された点。古志遺跡群ではこの時期に集落を区画するように機能していた大溝が埋まり、その上面に上器を多量に廃棄・置き並べる行為とその後に集落の断絶が認められている。遺跡群中で最も北寄りに位置する本例により、集落の広がりが確認された。

- 古墳時代後期後葉の遺物を多量に廃棄した溝が確認された点。大刀など特殊な遺物も含まれ、一連の祭礼行為のなかで湿地化した溝に意図的に置かれた様子がうかがえる。近年の調査で出雲平野における同様の例が増加しており、集落内・集落周辺での祭祀行為の内容を考える上で重要な資料が得られた。

- 奈良時代の掘立柱建物群、区画溝、柵列などが多数出土した点。『出雲國風土記』の記載による位置関係や出土した遺構・遺物の官衙的色彩などから、神門部の郡家に関連した施設とみられる。

上記の遺構を含め、各時期の遺構・遺物の概要是p.16 Tab.4に一覧表としてまとめた。

また、遺構に伴う遺物以外に、遺構面上に堆積した包含層から時期幅のある遺物が出土している。その破片点数はF区6,000点、G区4,400点あまりであった。

第2節 本書の構成

本書の構成と主な内容は下記のとおり。

Tab. 3 本書の構成と主な内容

| | | 主な 内 容 |
|------|------------------|--------------------------------------|
| 第1章 | 古志本郷遺跡の位置と環境 | 遺跡の立地や地質的環境と、周辺の遺跡の概要 |
| 第2章 | 調査の経緯と経過 | 調査に至る経緯と、当遺跡の過去の調査歴、調査の経過 |
| 第3章 | 調査成果の概要と本書の構成 | 調査成果の概要と一覧 |
| 第4章 | 遺跡の基本編号と包含層遺物 | 遺構面上の堆積土（包含層）の状況と同層出土遺物の検討 |
| 第5章 | F区の調査成果 | 鐵冶関連と官衙関連を除く遺構と遺物 |
| 第6章 | G区の調査成果 | 官衙関連以外の遺構と遺物 |
| 第7章 | 官衙関連遺構の調査成果 | 柱立柱建物跡・溝跡・柵列跡など神門部家に因縁する遺構・遺物の個別事実報告 |
| 第8章 | 鐵冶関連遺物の考古学的調査 | 官衙に伴う可能性がある鐵冶関連遺物の出土状況や時期、所見、評価など |
| 第9章 | 鐵冶関連遺物の分析調査 | 第8章の遺物に関する、自然科学的観点からの分析結果 |
| 第10章 | 古志本郷遺跡の官衙遺構と神門部家 | 出土した官衙遺構の評価と、神門部家、出雲國風土記との関係に関する考察 |
| 第11章 | 総括 | 時期ごとの遺跡の消長と、成果のまとめ |

(1) 数値はそれぞれ調査区上端面積と（調査区下端面積）を記した。

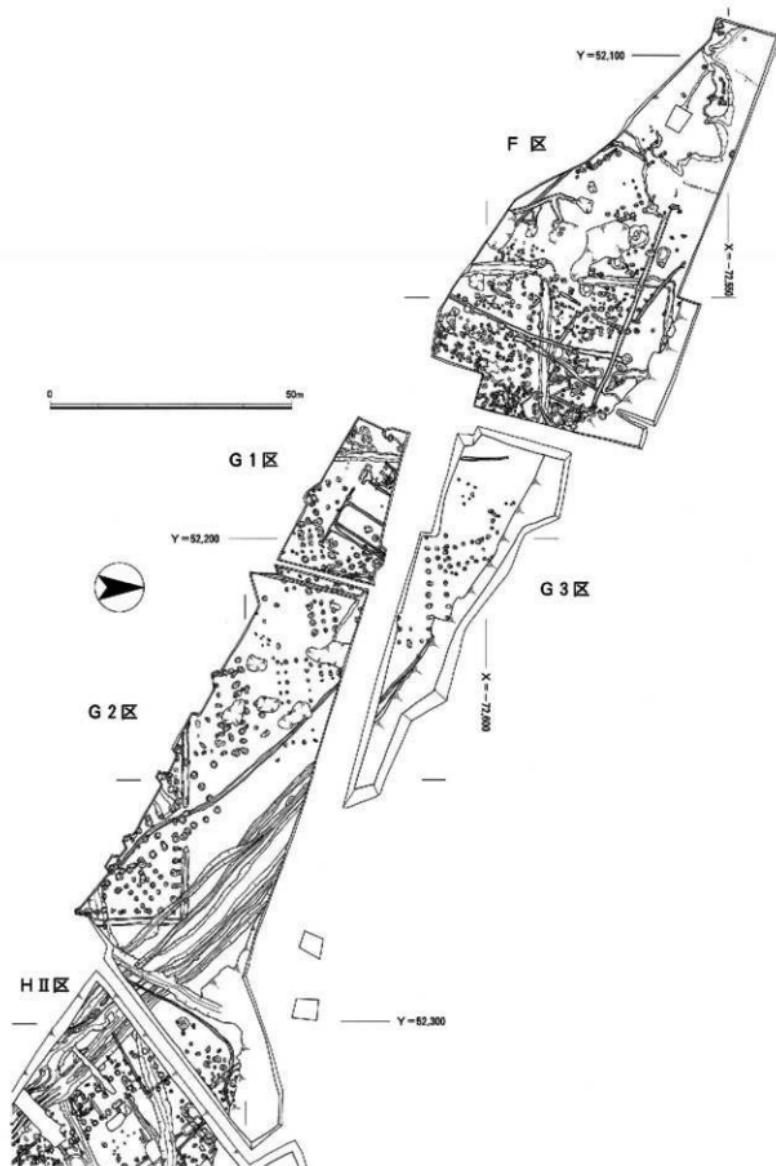


Fig. 6 F・G区全体図 ($S = 1/1,000$)

※写真はF区（平成10年8月19日）とG区（同年12月17日）を個別に撮影し、合成したもの

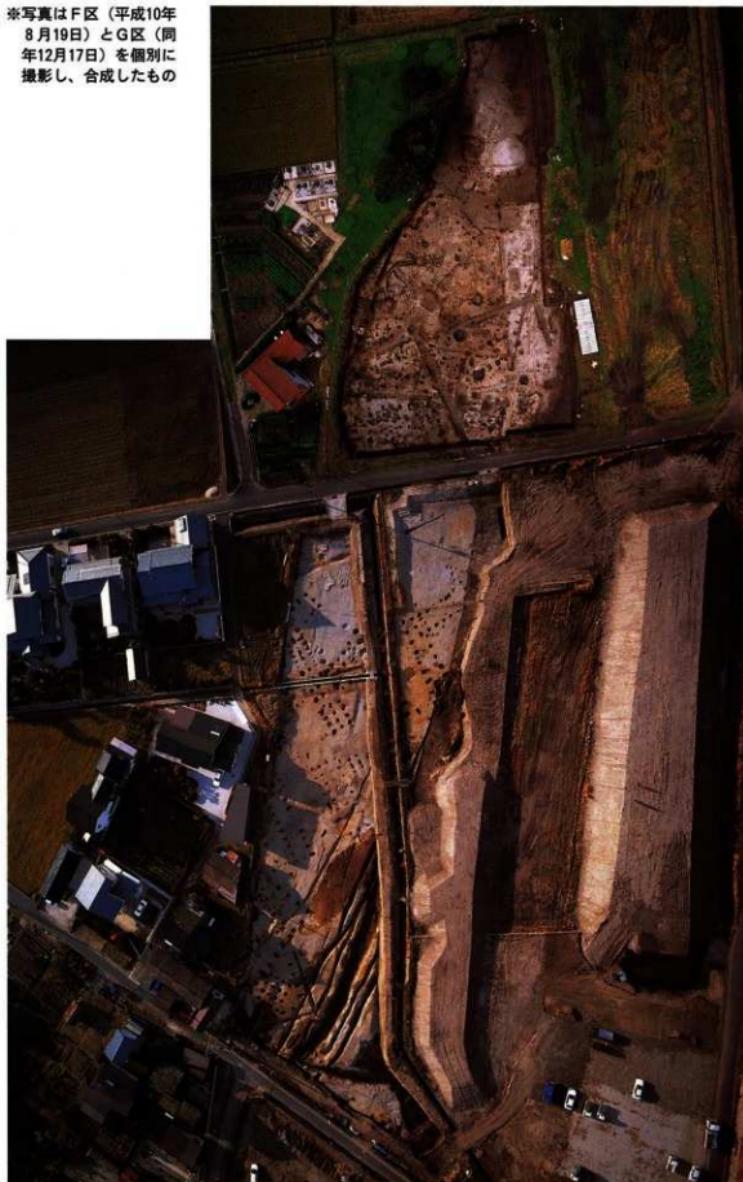


Fig. 7 調査区全域航空俯瞰写真

Tab. 4 古志本郷遺跡 F・G区 時期別的主要な調査成果一覧表

| 時 期 | 内 容 | 遺 構 名 | おもな 遺 物 | 掲 載 ページ |
|-----------------|--|---------------------------------|-------------------------------|---------|
| 弥生時代 前期 | 甕破片が出土した溝 | G 2 区 SD29 | 甕破片 | 182ページ |
| 〃 中期末～後期初頭 | 湿地に堆積した遺物包 含層 | F 区黒色土 | 甕、脚付壺など 7点 | 50ページ |
| 〃 後期初頭 | 小型の甕を納めた土坑 | F 区SK176 | 小型の甕 1点 | 52ページ |
| 古墳時代 前期前葉 | 最終段階に土器が一括 多量廃棄された溝 | G 2 区SD41 | 複合口縁甕、壺、鼓形 器台、高环など計48個 体以上 | 150ページ |
| | 土器を廃棄した井戸跡 | G 2 区SE01 | 複合口縁甕・壺など 9 個体以上 | 177ページ |
| | 井戸脇に立てられた掘 立柱建物 | G 2 区SB23 | | 224ページ |
| 〃 後期後葉 | 大刀・手捏ね土器など を含む多量の遺物が出 土した溝 | G 2 区SD39 | 大刀、土玉、手捏ね土 器、須恵器各種、土師 器各種など多数 | 102ページ |
| 古墳時代後期～奈良時代 | 鍛冶関連遺物が集中す る溝、土坑など | F 区SB01、SD 12、SK197、SK 304など | 楕円鍛冶溝、羽口、炉 壁、鉄製品など | 293ページ |
| 奈良時代 | 官衙関連とみられる遺 構群。大型のものを含 む掘立柱建物群と、溝 によって地割された方 形区画、櫓列など | G 2 区SB11・ 12、SD32・33、 SA03など多数 | 円面硯、転用硯、墨書 上器、銅帶金具など | 187ページ |
| | 建物に伴わない土坑 | G 2 区SK458、 SK474、SK478 など | 円面硯、転用硯、瓦な どの特殊遺物 | 279ページ |
| 中世後半～近世 | 火葬墓・土葬墓 | F 区SK180など 31基以上 | 北宋錢、土師質土器な ど | 65ページ |
| 近世後半 (18世紀後半以降) | 水田跡（杭列による土 留め、耕作面など） | | 肥前系磁器、国産陶器 など | 85ページ |

第4章

遺跡の基本層序と
包含層遺物

章4業

この日本基の特徴
特徴集合店

第4章 遺跡の基本層序と包含層出土遺物

第1節 遺跡の基本層序

1. 遺構面の概要

古志本郷遺跡F・G区では、遺構が検出される遺構面は1面のみである。遺跡一帯の基盤をなす灰白色～浅黄灰色の砂層がいわゆる「地山」⁽¹⁾であり、遺構はこの砂層の上面から掘り込まれている。

調査が行われる以前、調査区の一帯は畠地または草地、一部が水田として利用されていた。したがって耕作や上地改良事業等によって、過去の地表面は削り取られて攪乱されており、遺構が確認される砂層上面は本来の遺構掘り込み面とは異なる。残存している遺構面、すなわち砂層の上面の高さは地点によって大きく差がある。水田耕作によって深く削られたF区北西端で海拔6.5m、神戸川から最も離れ、微高地に近いG区南際で海拔8.5m程度である。

2. 遺物包含層の概要

遺構面である灰白色砂層（「地山」）の上には、木分解有機物を主体とする暗褐色～黒色土が堆積している。全般に砂粒を少量含み、比較的粘性が高い。これらの土層中には弥生時代～現代に至る遺物が一定量包含されており、これらをまとめて包含層と称する。これら包含層は有機物の自然堆積によって形成されたり、あるいは畑の耕作上として客土されたものであるが、土地改良事業等で攪乱を受けていて年代的な累重関係はない。すなわち、地山直上から現代の遺物が出土しうる。遺跡の南北方向の土層断面を示したFig. 9では、Eラインの1・3・14層がこの包含層に相当する。おおむね現地表から50～70cmの厚みをもって堆積している。

3. 水田跡の層序

調査区の大半⁽²⁾は上記の基本層序からなり、堆積状況は比較的単純である。ただし水田として利用されていた遺跡の北辺沿い、すなわち神戸川に近い地域⁽³⁾では地山面が低く掘り下げられており、やや複雑な堆積をなしている。これらの土層は大きく3種に分類が可能である。A. 水田土は耕作面の基盤となった土層で、水田面の最下層にみられる。還元雰囲気でのグライ化作用によって暗青灰色の色調をもつことが多い。B. 耕作土は稻を植える上層で、耕作中は安定して最上層にあったものである。木分解有機物が多く含み、暗褐色～黒色を呈し粘性が高い。有機物は施肥や刈り取り後の根株の腐朽によって供給されるものである。水田に水を張った期間に水中で酸化結晶化して沈殿した酸化鉄が、明橙色の斑状もしくは薄い水平堆積として混じっている。C. 洪水堆積土は神戸川の洪水によって突然的に堆積するもので、Bの耕作土を覆うように認められる。Fig. 8・9ではAラインの3層・8層、Cラインの2層などが相當する。基本的に基盤層に由来する砂質土が主体で、粘質土と薄い互層になる場合もある。水流による粒度の淘汰を受けている点で判別可能である。

水田跡での上層は、基本的にAが最下層にあり、その上にBとCが交互に堆積している。このことから、神戸川の氾濫により幾度か水田が土砂に覆われ、その上にあらためて水田面を作り直したことがうかがえる。これらの水田が機能した時期はそれほど古くなく、現地表の直下が近年までの水田面、また現地表下150cmの最下層水田面が18世紀後半以降のものである。

(1) 三瓶山の火葬物が繩文時代後期頃に堆積したと考えられるもので、厳密な地山とは異なる。

(2) G区ほぼ全域とF区の南半

(3) G3区北辺とF2区北辺

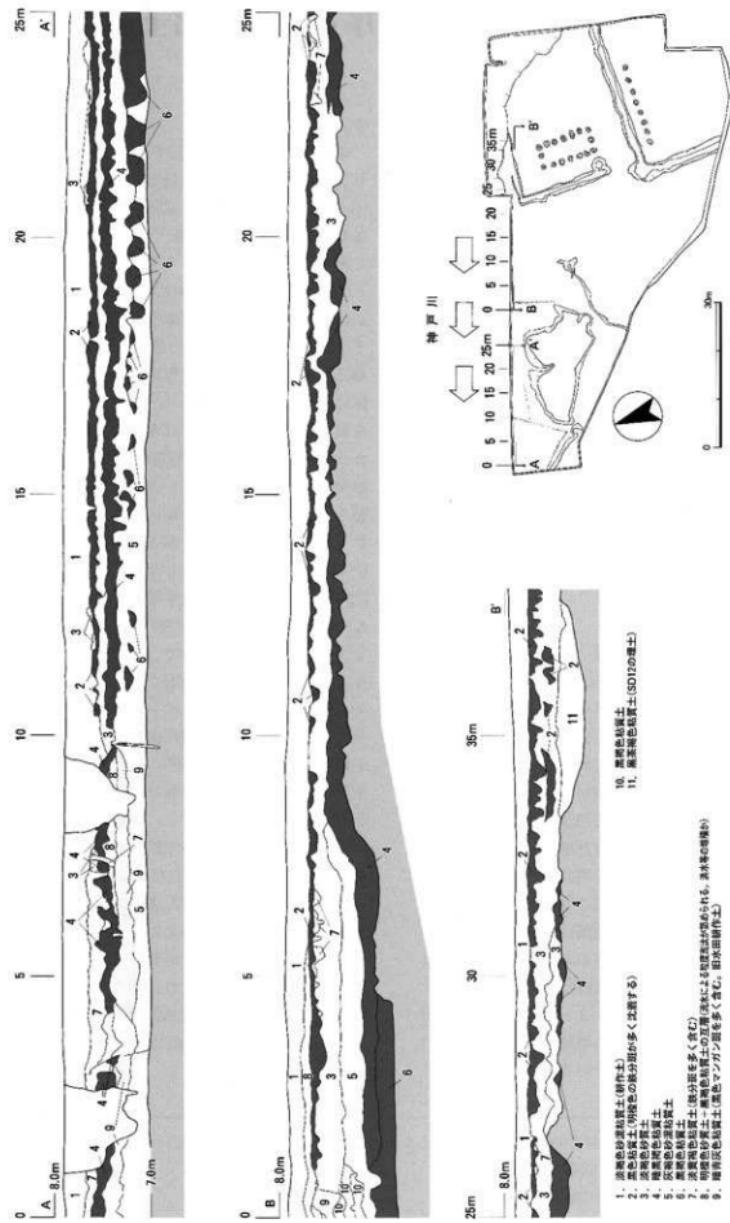


Fig. 8 F区土壤図① (水平1/100、垂直1/50)

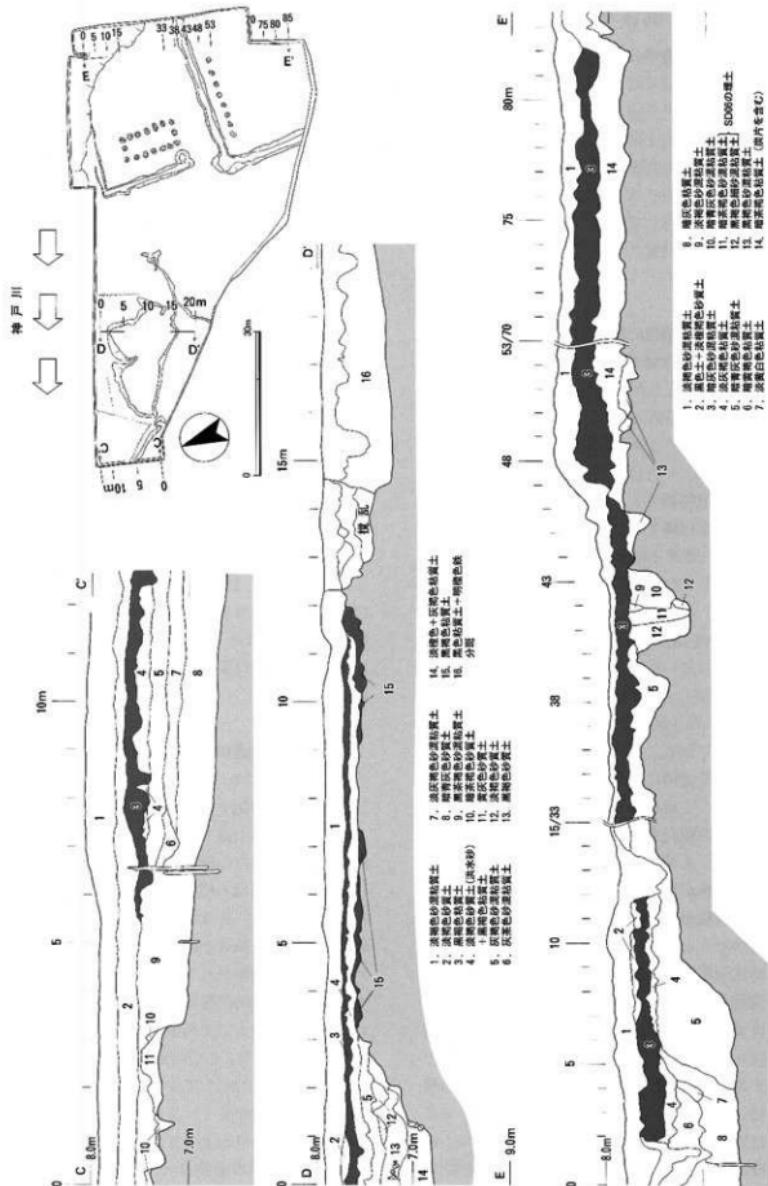


Fig. 9 F区土壤図② (水平1/100、垂直1/50)

第2節 包含層遺物の概要

1. 包含層遺物の総量

前節で解説した包含層からは、弥生時代から近現代に至る様々な遺物が出土した。これらは種別・出土区域ごとに分類をおこない、全資料の破片点数と重量を計測して集計した。その結果は右ページに示したとおりで、破片点数10,387点、総重量131,314gであった。なお、この数量には遺構内から出土したものと含まない。

2. 包含層遺物の時期的傾向

上記の包含層遺物については、時期別の割合および出土した地区別の比較を行っている。結果はFig. 10に示した。時期別の割合では2つのピークがあり、一つは古墳時代後期～奈良時代、一方は近世以降で、両者を合わせると全遺物量の8～9割を占める。この傾向は、次章以降で述べる遺構の時期別消長ともほぼ一致する結果を示している。すなわち、遺跡としての時期的消長を反映した結果といえよう。

次に地区別に比較した場合だが、特に目立った偏りは見いだせない。強いて言えば、近世以降発展した石州街道に近い東側の調査区(G 2・G 3区)で近世以降の遺物が多い点が指摘できる。遺物全体量の比較では、基本的に調査面積に比例した量が出土している。これもごく自然な結果である。

全体の傾向を総括するならば、以下のようになる。まず、縄文時代の遺物は無く、弥生時代前期が最も古い。弥生時代後期から古墳時代前期まで、量は少ないながらも連続して遺物がみられる。この後断絶がみられ、古墳時代中期から後期中葉にかけては、ほとんど遺物が出土しない。ところが、古墳時代後期後葉から奈良時代にかけては突如遺物量が増加する。遺物の多くが須恵器破片か、甕など土師器体部の破片のために、細かな時期の検討はできない。よって、古墳時代後期から奈良時代にかけて時期的偏りが無く万遍なく遺跡が継続するのか、あるいは一定の短期間に集中するのかは明らかでない。続く平安時代

から中世にかけては、遺物が非常に少ない時期で、わずかな貿易陶磁があるのみである。これは遺構の消長とも一致する。中世後半から近世初頭にかけて少しずつ遺物量は増加し、国産陶器や青花も一定量出土している。また、小皿を中心とした土師質上器も多く出土している。(遺物総出土重量の5%程度)これらの詳細な時期は不明であるが、中世後半から近世初頭のものとみられる。近世以降は国産陶器と肥前系磁器が非常に多く出土している。肥前系磁器の内容から見ると、生産年代が17世紀後半～18世紀後半の割合が比較的高く、遺跡のピークと言えそうである。ただし、陶器は近現代まで連続してみられ、ほぼ断絶なく人々の営為は続いたものと判断される。

第3節 包含層遺物の詳細

1. 図・写真掲載の基準

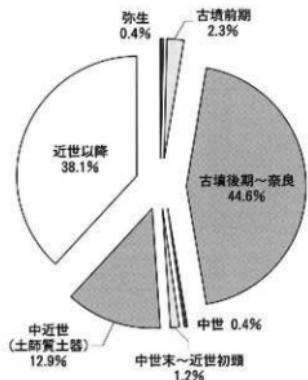
包含層から出土した多量の遺物のうち、主に中世以前で図化が可能なものについて実測した。図をFig. 11・12に、写真をFig. 13～17に掲載している。また中世の陶磁器は種別ごとに写真のみをFig. 18～25に掲載している。以下では時期を追ながら、掲載遺物について述べる。

2. 実測図掲載遺物の詳細① (Fig. 11)

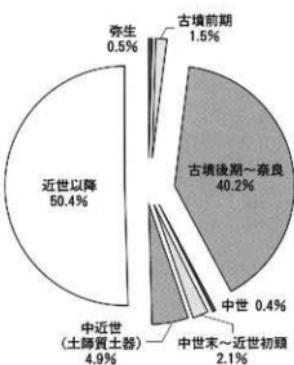
調整や法量については観察表Tab. 7に示した。以下は特記すべき点のみを記す。

1～3は弥生土器である。1は甕の口縁部破片で、外反した口縁端部の側面に刻みを施している。詳細は不明だが前期に類例がみられるものである。2は高杯の脚部にかけての破片である。6条以上の凹線と丁寧なヘラミガキによって加飾されている。中期後半のものである。弥生時代前期～中期までは遺物量が少なく、かろうじて図示できるものは上記2点のみであった。この時期は遺構も少なく、遺物量もそれに対応して少ない。弥生時代後期は遺物量がやや多く、3に示したと同様の甕破片が30点余り出土している。

古墳時代前期の遺物は200点以上の破片が出土している。薄手のいわゆる古式土師器の



1. 包含層遺物の時期別割合（破片点数）



2. 包含層遺物の時期別割合（重量）

3. 地区別遺物量（重量、単位 g）

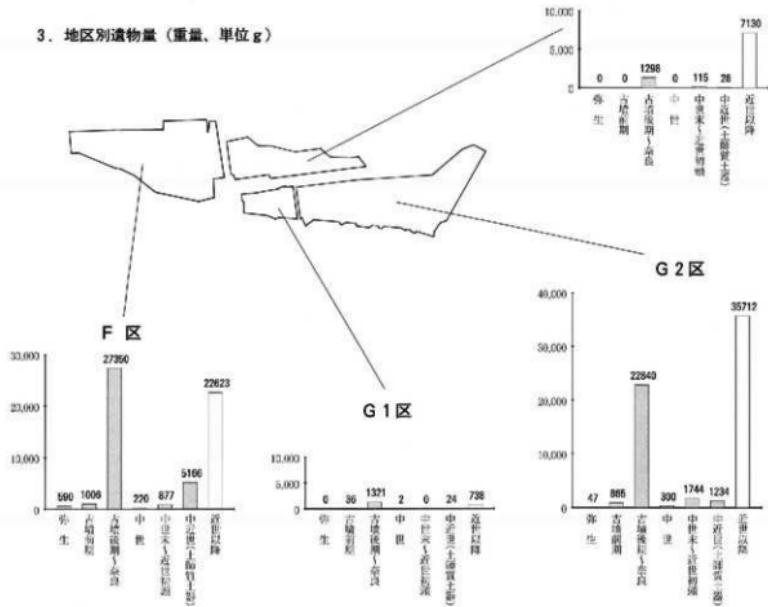


Fig.10 包含層出土遺物の破片点数・重量比較

複合口縁壺が主体であるが、いずれも細片で図示はしていない。続く古墳時代中期は遺物量が非常に少なく、わずかに19の高环が可能性があるのみである。19の高环は環部のみの破片で、外側面に赤色塗彩し、内面に放射状の暗文を施している。口縁端部側を外反させ、底部との境界に稜をもつ形状は、三田谷1遺跡B区⁽¹⁾で多量に出土したものと共通する。

5~15は多量に出土した須恵器の一部である。須恵器は壊破片を除いても1,000点以上出土しているが、いずれも小片である。時期が判るものは少ない。図示した以外には受けの立ち上がりをもつ壺身（壺H）の破片が一定量出土している。6世紀中葉以前のものは無く、おむね6世紀末の出雲4期（TK209型式併行）から8世紀にかけてのものである。そのうち、5と6はF区東端の近い地点から出土した壺の蓋と身で、いずれも遺存状態が良い。出土状況からみて、本米組み合うものとみられる。7世紀前半の飛鳥II併行期のものである。土師器は17・18に示した単純口縁の壺が多く、その体部とみられる破片が多量に出土している。古墳時代後期～奈良時代の集落遺跡では普遍的に多く見られるもので、特に問題はないが、これに比べて赤色塗彩を施した壺や甕の破片が500点以上と多く出土している点が注目される。20~23は壺（皿）で、形状や調整にバリエーションがある。基本的に胎土は精選されており、最終調整で丁寧なミガキが施される。赤色塗彩されたものも多い。このなかで際立っているのが、21に示した高台付きの壺である。これはF区の中央付近で、9の須恵器点と重なって出土した。胎土が非常に粗く砂粒を含むうえ、調整が甘く表面が荒れている。内面には放射状の暗文が間隔を密に施されている。

3. 実測図掲載遺物の詳説② (Fig. 12)

24~26は奈良時代の特殊遺物である。

24は高台付きの皿で、全面が赤色塗彩されている。高台を含む底部の破片のみがF区の東側、SB01の付近から出土した。高台内には「福」一字が刻まれている。針状の細い工具で引っ掻くように削って書かれており、線の中には赤色顔料が入らない点と、線の中の粒子表面が荒れており粘土の動きが無い点から、焼成後に書かれたものと判断される。字の位置は高台の中心からやや上方にずれているが、その下には文字が続いている痕跡は無く、「福」一字が刻まれていたとみられる。

25は鈎帯金具の一つの鉢尾である。四辺のうち二辺は破損して失っている。G 2区のSD39上方から出土した。銅製の鋳造品で、内面には2ヶ所に突起が作り出されている。上面および側面には整形時に鋸パリを落としたと見られる研磨痕が多く残されている。側面の研磨は粗く、研ぎ動作の単位を示す稜線を残す。表面には黒漆などが塗布されたような痕跡は残っていない。鈎帯を構成する他の金具は一切見つかっていない。

26は須恵器の凹面鏡の脚部破片である。脚部に方形の透かしを多数巡らす脚足鏡の最下部に相当し、透かし2ヶ所分が残っている。包含層からは、転用鏡を含め鏡はこの1点しか出土していない。

27~47は中近世の遺物である。

27は土師質土器の鍋で、外面に黒色煤が付着する。近隣では天神遺跡⁽²⁾などに類例があり、13世紀頃のものと考えられる。28は青銅製の耳搔きで、近世以降のものと考えられるが、光形品で出土したため図示した。円形の持ち手部分は鳥（鶴か）が羽根を広げた姿がデザインされている。29・30は肥前系（吉津系）陶器皿である。図示したのはこの2点だけだが、肥前系陶器は破片数にして合計69点出土している。Fig. 25に写真を掲載したのはその一部である。29・30ともに灰釉で29は胎土積み、30は蛇の目釉剥ぎで簡略な植

(1) 鳥取県教育委員会1999『一田谷1遺跡 (Vol. 1)』 姫伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V

(2) 出雲市教育委員会1986『天神遺跡発掘調査報告書IV』

物文のような鉄絵が施される。いずれも生産地の編年で17世紀前半のものである⁽¹⁾。

31~47は11世紀後半から近世の上質土器である。形態上の特徴から便宜的に分類して図示した。31と32の皿は立ち上がりが低く若干内湾する。内面にろくろ成形のナテ痕を残し、口縁が歪むなど仕上げが甘い。33の环は側面下半を強くナデ、内湾する器形である。古志本郷遺跡A~E区の報告書上で行われた型式分類と年代の検討⁽²⁾に拠るならば、31・32が皿a・b類に、33が环B類にあたり、これらの型式は共存することが確認されている。古志本郷遺跡E区SK60では片切彫り青磁碗と供伴例があり、おおまかに青磁碗の年代には14世紀中葉~15世紀前半の生産年代が、15世紀後半までの使用年代が考えられている⁽³⁾。次に34と35は直線的な器形で器高が高く、わずかに内湾するものである。34が皿d類に、35が环C類に該当する。皿d類はC区SK24で青磁碗B 4類⁽⁴⁾と供伴、环C類はA区SD03などで青磁碗D類との供伴があり、おおまかに15~16世紀ごろのものといえる。次に36・37は直線的な器形で口縁が大きく開くもので、环D類に該当する。良好な出上例が無く時期は判然としないが、型式変化の点などから、おおまかに16世紀代のものとみられる。38~47は小型の皿である。それ自体で年代を論じるにはまだ編年が不確定な部分が多い。大まかにくくるならば、器高が低くやや内湾する38~42は皿a類・b類に類似し、おおまかに中世後半のもの、外反する器形で口縁端部を丸く肥厚させる43~47が17世紀のものといえよう。

4. 中近世陶磁器 (Fig. 20~27)

陶磁器は重量にして50kgを超える量が出土した。そのうちの大半は18世紀~近代のもの

であり、ごく一部の写真をFig. 25・26に掲載した以外は本書では非掲載としている。これらの中から近世初頭以前、すなわち17世紀以前の資料を選別し、Fig. 18~24に写真を掲載した。

Fig. 18は貿易陶磁の白磁と青磁である。1は白磁水注の小片で、型式が不明なため11~13世紀としか言えない。2~4は白磁皿D群⁽⁵⁾で、白色の陶器質の胎上に乳白色の釉を施し、高台付近を露胎にしたものである。15世紀頃の使用年代が与えられる。

5~11は龍泉窯系青磁である。11が瓶などのいわゆる「袋物」で、その他はすべて碗の破片である。5は見込みに草花文を施す。6はへら描きの連弁文を施す碗B 3類で、14~15世紀のものである。7は細い線描きの連弁文を施す碗B 4類で、15~16世紀のもの、また8が口縁に雷文帯をもつ碗C 2類で15世紀後半から16世紀初頭にかけてのものである。9は無文で外反する碗D類で15世紀頃のもの、10は型式不明の青磁碗破片である。

Fig. 19は16世紀後半~17世紀初頭を中心とした中国陶器である。1・2は美濃天日碗で、1が底部、2が口縁の破片である。4は美濃の灰釉丸碗は龍泉窯系青磁蓮弁文碗を模倣したもので、16世紀代のものである。山雲地域では広瀬町宮田川河床遺跡で完形品の山雲例がある。

Fig. 23は肥前系陶器で、最上列の胎土目積碗や铁松碗から下段の砂目積碗まで、17世紀代のものである。

Fig. 24は青花の皿・碗としたが、判別が難しく一部に時期の下る肥前系磁器(伊万里)が含まれている。

(1) 盛 峰雄2000『陶器の編年 1. 瓢・皿』『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

(2) 島根県教育委員会1999『古志本郷遺跡Ⅰ』p.308~

(3) 亀井明徳1980『日本出土の明代青磁碗の変遷』『鏡川猛先生古希記念古文化論叢』

(4) 青磁の分類は 国立歴史民俗博物館編1993『日本出土の貿易陶磁』による

(5) 白磁の分類は森田勉氏の分類による。森田 勉1982『14~16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』No.2

Tab. 7-1 包含層出土遺物 観察表① (実測図Fig. 11、写真Fig. 13~14)

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | | | 色 | 調査(内面/外面)・特記事項 | 既存度 |
|----|--------|------|--------------|-----------|------------|-------------|----------------------|--|-----------------------|
| | | | | 口径 | 高さ | 底径 | | | |
| 1 | G2区E | 弥生土器 | 甕 | - | - | - | 内外面:灰褐色 | 内面:ナゲ、口唇部剥離と月牙、粘土は石英粒を多く含る粗い | 口縁部のみ、全周の5% |
| 2 | F2区 | 弥生土器 | 壺 | - | - | - | 内外面:褐灰色 | 内面:丁寧なナゲ、軸部へ割り込み、6条以上、口縁部剥離と3条の凹痕、頸部茎ヨコナゲ | 頸部の一部、全体の5%以下 |
| 3 | F4区 | 弥生土器 | 甕 | 18.2 | - | - | 内面:浅黄褐色 外面:赤褐色 | 内面:口縁部ヨコナゲ、頸部以下へ割り込み、ヨコナゲ、口縁部剥離と3条の凹痕、頸部茎ヨコナゲ | 口縁・肩部、全周の20% |
| 4 | F2区 | 土製品 | 骨状土錐 | 全長 8.8 | 最大径 1.7 | 重量 14.2g | 全面:浅黄褐色 | 全面:ナゲ | 完形 |
| 5 | F6区 | 須恵器 | 环甕 | (10.0) | 27.0 | - | 内面:暗赤褐色 外面:緑灰色 | 内面:向転ナゲ | ほぼ完形 |
| 6 | F6区 | 須恵器 | 环身 | 10.2 | 4.0 | - | 内外面:灰褐色 | 内面:向転ナゲ・外側:口縁部剥離と軸部剥離へラケズリ、底部不正方向のナゲ | 全体の80% |
| 7 | G2区 | 須恵器 | 环身 | 11.0 | 5.8 | - | 内外面:灰褐色 | 内面:口縁部・体部剥離とナゲ、底部不正方向のナゲ | 全体の20% |
| 8 | F3区 | 須恵器 | 無輪甕 | - | - | - | 内外面:灰褐色 | 内面:回転ナゲ・外皮:口縁部・体部剥離とナゲ、底部不正方向のナゲ | 全体の80% |
| 9 | F3区 | 須恵器 | 甕 | - | - | - | 内外面:灰褐色 | 内面:回転ナゲ・外皮:底部剥離と軸部剥離へラケズリ、底部のみ、全周の30% | |
| 10 | G2区 | 須恵器 | 环身 | - | - | 9.6 | 内外面:オリーブ色 | 内面:不正方向のナゲ・外皮:軸部剥離後回転ナゲ・軸用剥離? | 底部のみ、全周の20% |
| 11 | F1区S | 須恵器 | 無輪甕 | - | - | 10.9 | 内外面:灰褐色 | 内面:回転ナゲ・外皮:軸部剥離後回転ナゲ | 底部のみ、全周の30% |
| 12 | F6区 | 須恵器 | 高环 | - | - | - | 内外面:オリーブ色 | 内面:回転ナゲ | 环筋の内側部から全体にかけて、全周の20% |
| 13 | G2区 | 須恵器 | 环身 | - | - | - | 内外面:灰褐色 | 内面:不正方向のナゲ・外皮:回転ヘラケズリの後不正方向のナゲ | つまろと天井部のみ、全体の10%以下 |
| 14 | F6区北 | 須恵器 | 环身 (軸用剥離) | - | - | - | 内外面:青褐色 | 内面:摩耗付着、つるつるに摩耗 外皮:回転ナゲ | つまろと天井部のみ、全体の10% |
| 15 | F3区W | 須恵器 | 甕 | 12.6 | - | - | 内外面:灰褐色 | 内面:回転ナゲ、底部指剥離えき 外皮:回転ナゲ、下部軸部へラケズリと底部剥離と高さ約5cmの高台内・回転ナゲ | 全体の40% |
| 16 | G2区 | 土師器 | 烟燭座 | - | - | - | 内面:赤茶色 外皮:浅黄色 | 内面:重い回転ナゲ、底部指剥離えき 外皮:底部剥離と火照化されし薄葉へ焼、一部にぼく痕や不良 | 全体の80%、口縁部欠損 |
| 17 | F区 | 土師器 | 甕 | 18.0 | - | - | 内面:オリーブ色 外皮:オリーブ色 | 内面:口縁部ヨコナゲ、軸部以下剥離の後軸部のヘラケズリ・外皮:軸部以下剥離の位置の目立ハケ日、口縁部ヨコナゲ、口縫波打つ | 全体の40% |
| 18 | F6区 | 土師器 | 甕 | 15.4 | - | - | 内外面:にぶい黄褐色 | 内面:口縁部へ頸部ヨコナゲ、底部剥離と軸部剥離へラケズリ | 上半部のみ、全周の20% |
| 19 | F3区E-S | 土師器 | 高环 | 18.0 | - | - | 内外面:赤茶色 底土:灰褐色 | 内面:丁寧なナゲ、放射状の横文と斜め方向のハケ日、口縫波打つ 外皮:底部剥離と軸部剥離へラケズリ | 环筋の一部、全周の20% |
| 20 | F6区 | 土師器 | 甕 | 16 | 18.0 | - | 内外面:にぶい橙色 | 内面:口縁部ヨコナゲ、底部剥離方 外皮:軸部剥離へラケズリ、底部不正方向のナゲ 外皮:軸部剥離へラケズリ、底部不正方向のナゲ | 全体の20% |
| 21 | F3区 | 土師器 | 环 | 18.2 | - | - | 内外面:明赤褐色 | 内面:口縁部ヨコナゲ、底部不正方向のナゲ 外皮:口縁部ヨコナゲ、軸部剥離へラケズリ、底部不正方向のナゲ | 全体の70% |
| 22 | G2区SW | 土師器 | 环 | 14.4 | - | - | 内外面:赤色 外皮:褐色 | 内面:丁寧な回転ナゲ・外皮:底 部剥離へラケズリ | 全体の20% |
| 23 | F2区 | 土師器 | 环 | 12.4 | - | - | 内外面:にぶい黄褐色 | 内面:回転ナゲ・外皮:回転方向のヘタミガキ | 全体の30% |

Tab. 7-2 包含層出土遺物 観察表② (実測図Fig. 12、写真Fig. 14~17)

| 番号 | 出土地区 | 種別 | 器種 | 法算(cm) | | | 色調 | 調査(内面/外面/特記事項) | 残存状況 |
|----|------------|-------|------|--------------|--------------|-------------|--------------------------------|--|-------------------|
| | | | | 口径 | 高さ | 底径 | | | |
| 24 | F 5区 | 土師壺 | 高台付壺 | - | - | - | 高台係 6.9 内:赤褐色 外:黃褐色 | 内面:口輪ナデ(ミガタ)・外面・ 高台内:回転ナタ、縫合「縫」 | 高台を含む壺部のみ、全体の10% |
| 25 | G 2区 | 銅製品 | 銅葉金具 | 横径長 3.1cm | 從元幅 3.6cm | 重量 10.8g | | 表面・側面:整形時の研ぎ跡痕と 縫合部:2箇所に突起/厚さ1.8 ~2.1mm | 側面と底部破損 |
| 26 | G 2区E | 須恵器 | 円面鏡 | | | - | 灰色 | 内外面:回転ナタ、透かし2箇所 保存残 | 埋蔵部のみ、 全周の3%以下 |
| 27 | G 2区 | 土師質土器 | 壺 | - | - | - | 内面:黄褐色 外:青い色 褐色 | 内面:横方向のハケ面・口唇の段 差分ハケ口をナデ消す・外面:絞 り方向のハケ面、口縫部は折によ りつまみ出しながらヨコナデ | 山腹部のみ、 全周の5%以下 |
| 28 | F区 | 金属製品 | 耳環 | 全長 6.3g | 半子径 2.0cm | 重量 8.3g | 暗緑色の樹脂 物付着、一部に暗赤褐色 の樹脂露出 | 鋲頭製、鳥(鶴)が両翼を広げた形 がモチーフ | 完形 |
| 29 | F区 トレンチ | 粘土系陶器 | 壺 | 11.5 | 3.4 | 4.0 | 動子:藍赤褐色 帯姿:淡緑褐色 | 動子・壺身横み/外面下半露胎/削り だし高台、兜巾あり | 50% |
| 30 | F 6区 | 肥前系陶器 | 壺 | 13.2 | 3.8 | 4.8 | 動子:淡赤褐色 腰姿:淡緑褐色 | 内面見込みら松の月輪物語/鉄継草 行文?/外面下半露胎/削りだし 高台、兜巾かすかに残る | 40% |
| 31 | F 3区 | 土師質土器 | 壺 | 7.2 | 1.6 | 4.8 | 浅黄褐色 | 内外面:回転ナデ/底部:回転余 切り | 60% |
| 32 | F 6区 | 土師質土器 | 壺 | 7.8 | 1.9 | 5.6 | 明褐色 | 内外面:回転ナタ/底面:回転余 切り | 50% |
| 33 | F 6区 | 土師質土器 | 壺 | 13.2 | 3.7 | 8.0 | 明褐色 | 内外面:回転ナタ/底面:回転余 切り/内面底に粘附 | 70% |
| 34 | F 3区 | 土師質土器 | 壺 | 7.5 | 2.6 | 4.0 | 浅黄褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り | 90% |
| 35 | F 6区 | 土師質土器 | 壺 | 10.4 | 3.4 | 2.8 | 灰黄褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り | 80% |
| 36 | F 6区 | 土師質土器 | 壺 | 11.2 | 2.8 | 5.4 | 褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り | 50% |
| 37 | F 6区 | 土師質土器 | 壺 | 13.7 | 3.5 | 7.0 | 浅黄褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り | 60% |
| 38 | F 7区 | 土師質土器 | 壺 | 7.0 | 1.5 | 5.2 | 内面:灰黄 褐色 | 付着物により調査不明/全面に多 量の煤付着、その上に全面にわたっ て明褐色の竹織物が囚着 | 全体の80% |
| 39 | F 6区 | 土師質土器 | 壺 | 8.0 | 2.0 | 4.5 | 明褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り | 50% |
| 40 | F 1区 | 土師質土器 | 壺 | 7.0 | 1.6 | 4.3 | 灰黄褐色 | 調査不明/内外面とも付着物あり /糸切り痕はなめらかな凹凸でな く、角張る | 70% |
| 41 | F 1区 | 土師質土器 | 壺 | 6.8 | 1.4 | 3.2 | 灰黄褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り、口縫部の一部に煤付着 | 底部剥離 |
| 42 | F 6区 | 土師質土器 | 壺 | 7.4 | 1.5 | 4.9 | 明褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り、口縫部の一部に煤付着、 口縫部に煤付着 | 90% |
| 43 | F 1区 | 土師質土器 | 壺 | 6.1 | 1.7 | 4.3 | 明褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:静止糸 切り | 完形 |
| 44 | F 1区 | 土師質土器 | 壺 | 7.0 | 1.7 | 5.0 | 浅黄褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り | 40% |
| 45 | F 2区S | 土師質土器 | 壺 | 9.0 | 7.1 | 2.1 | 明褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り | 60% |
| 46 | F 6区 | 土師質土器 | 壺 | 9.6 | 7.0 | 2.3 | 浅黄褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り | 20% |
| 47 | F 1区 | 土師質土器 | 壺 | 9.0 | 5.8 | 2.0 | 灰黄褐色 | 内外面:回転ナデ/底面:回転余 切り | 90% |

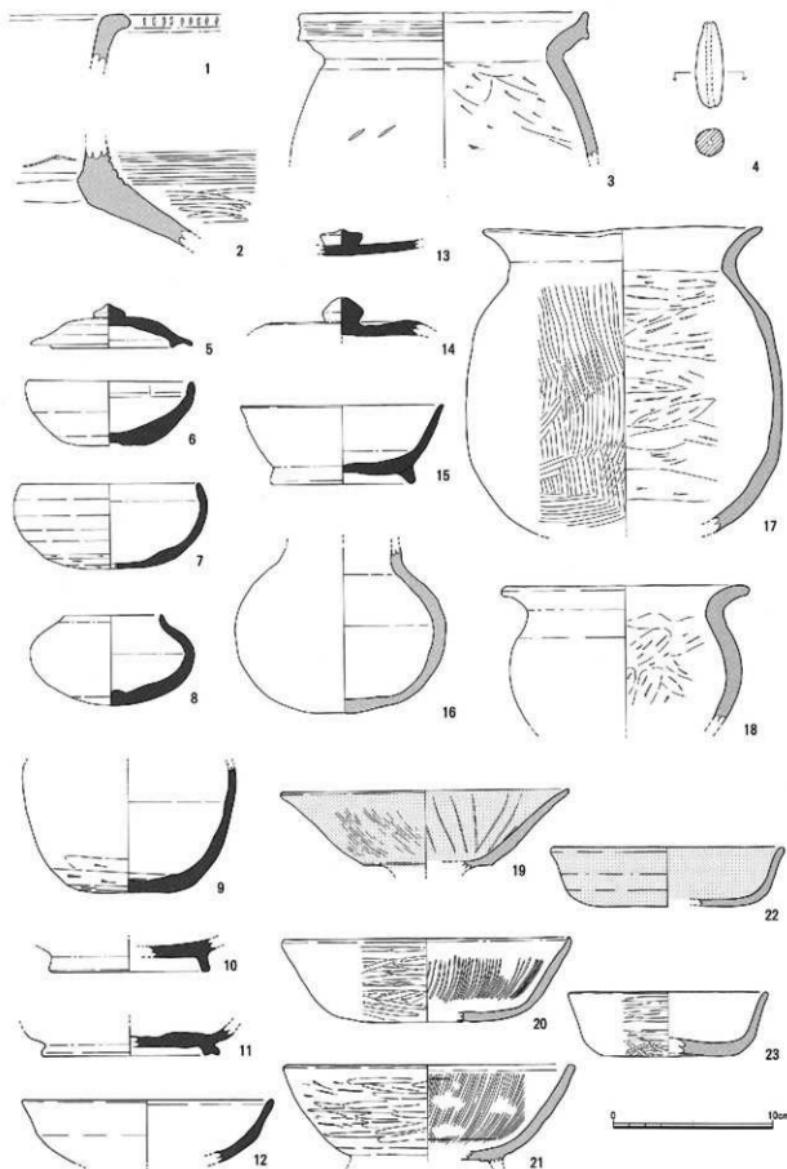


Fig.11 包含層出土遺物 実測図① (S = 1/3)

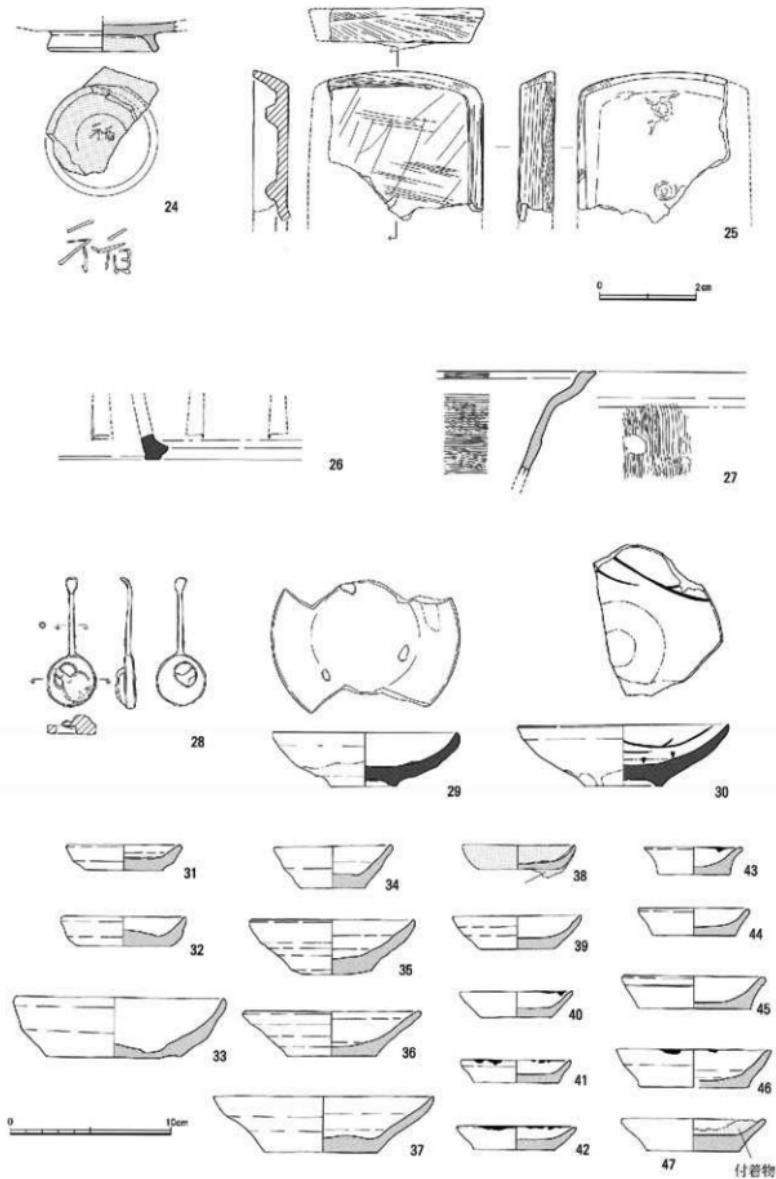


Fig.12 包含層出土遺物 実測図② (25は等倍、28はS=1/2、その他はS=1/3)

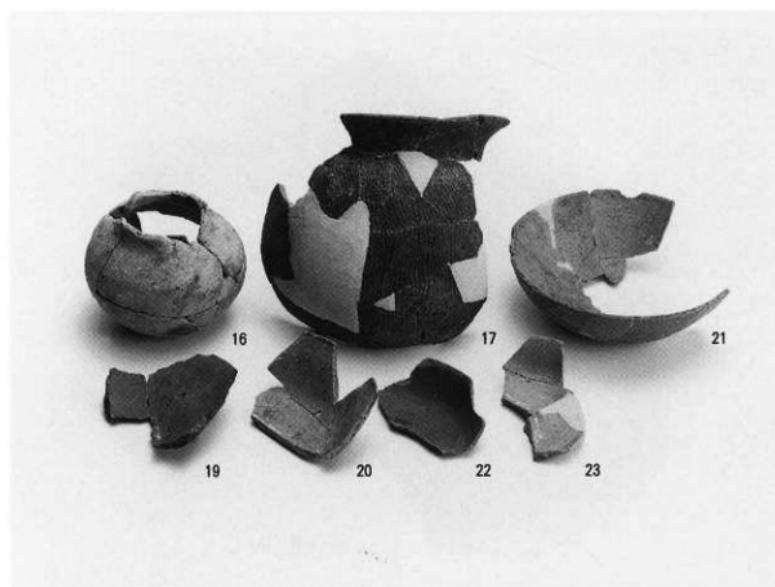
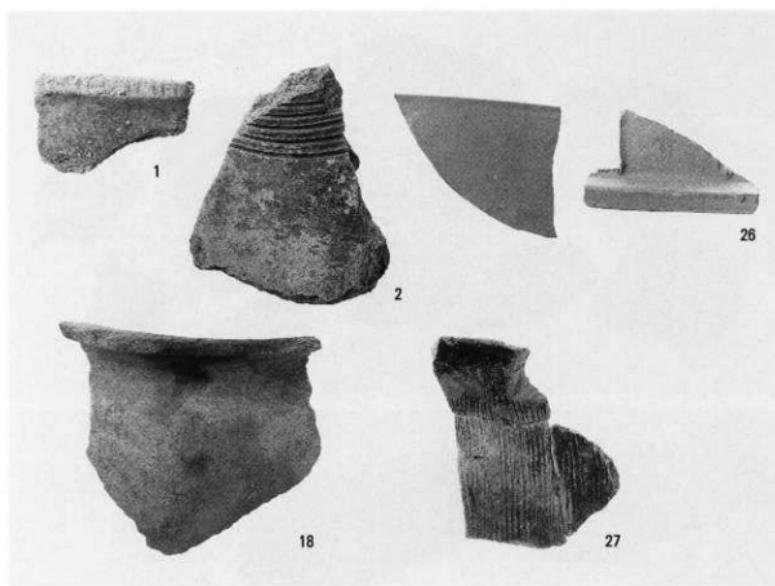


Fig.13 包含層出土遺物 写真① (実測図Fig.13~14)

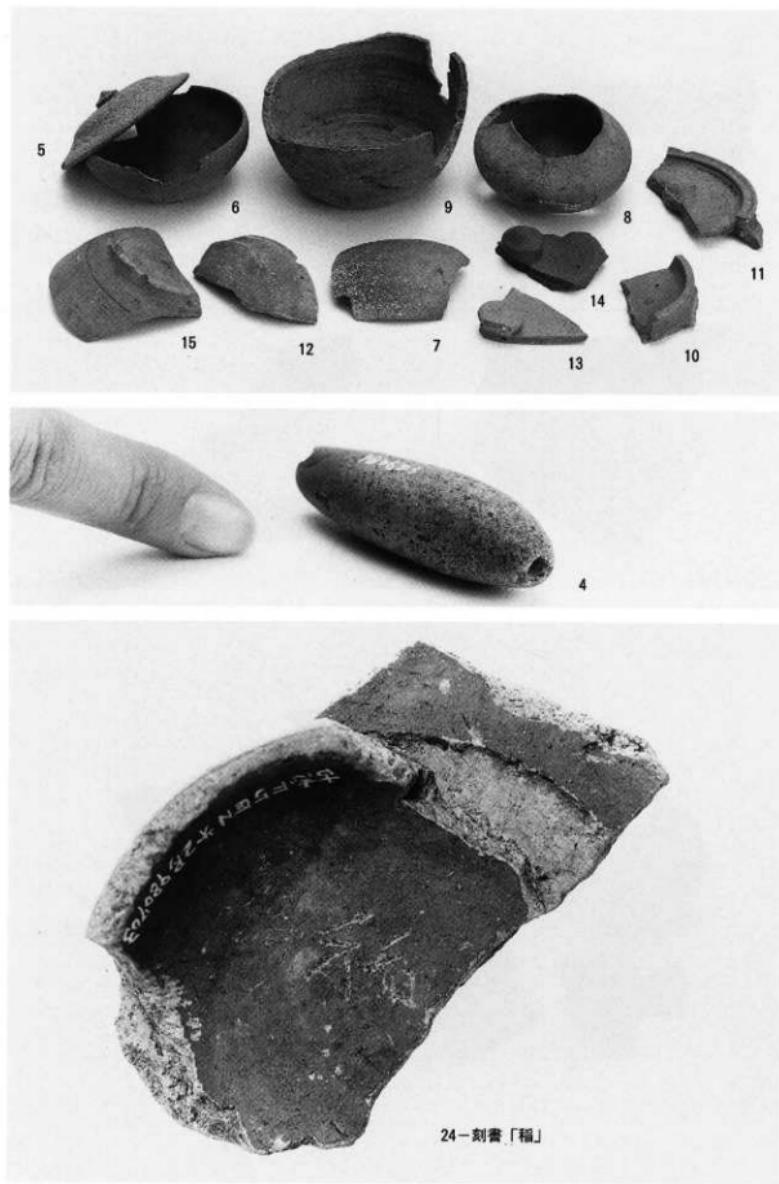


Fig.14 包含層出土遺物 写真② (実測図Fig.13~14)

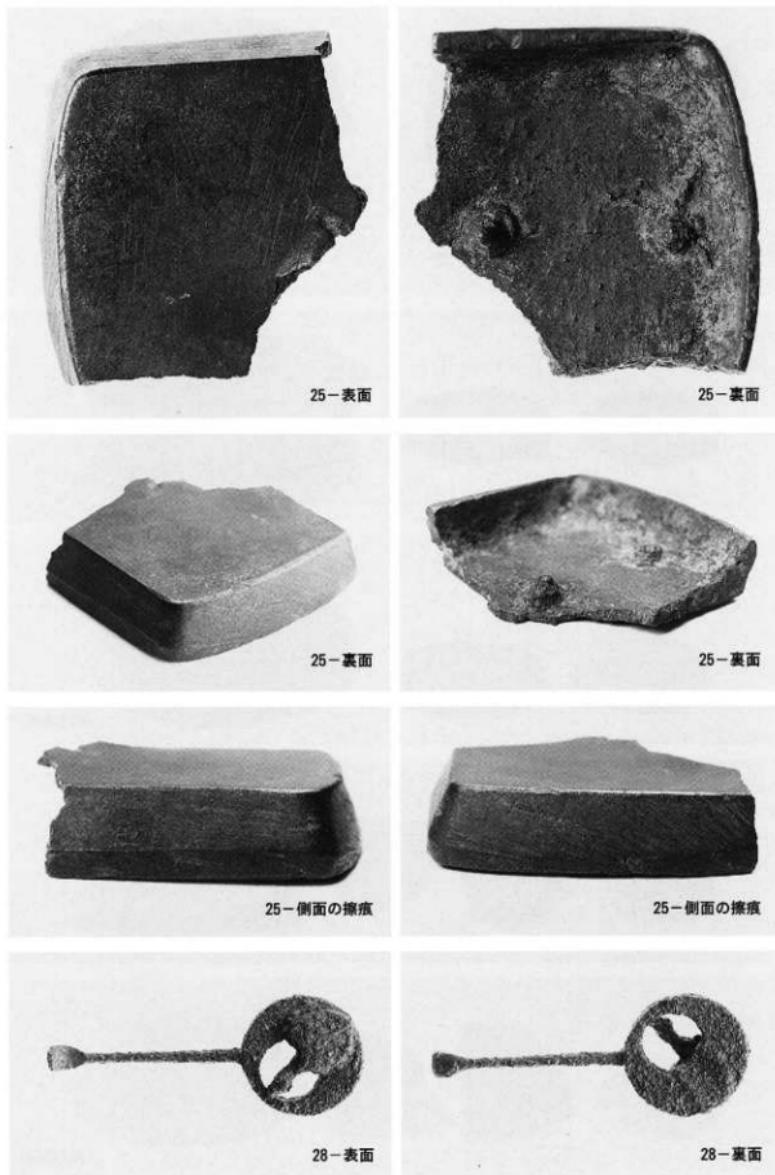


Fig.15 包含層出土遺物 写真③ (実測図Fig.14)

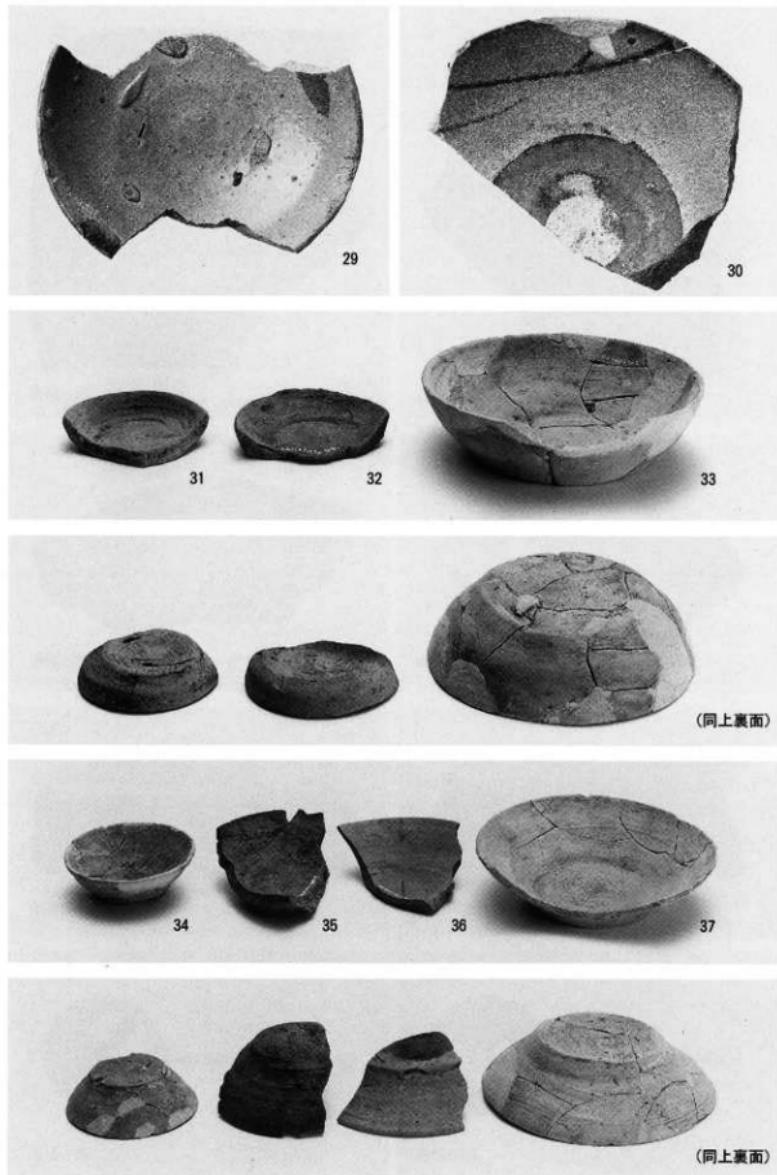


Fig.16 包含層出土遺物 写真④ (実測図Fig.14)



38 39 40 41 42



(同上裏面)



43 44 45 46 47



(同上裏面)

Fig.17 包含層出土遺物 写真⑤ (実測図Fig.14)



Fig.18 包含層出土遺物 写真⑥（貿易磁器 白磁・青磁）



Fig.19 包含層出土遺物 写真⑦（国産陶器）

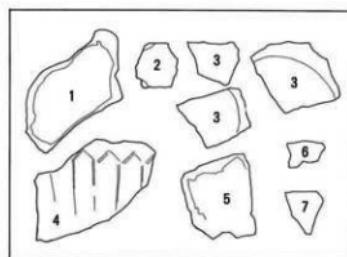
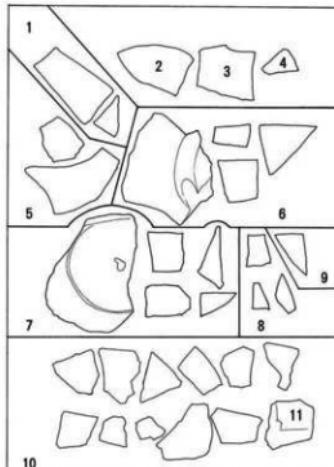


Fig.18

1~4:白磁

[1:水注、見込文、11世紀
2~4:皿、森田D群、15世紀頃]

5~11:龍泉窯青磁

[5:瓶、見込文、花文、6:瓶B3個、飴済弁文、14~15世紀頃]

7:瓶B4個、繪描進文、15~16世紀頃

8:瓶C2個、圓文、15世紀後半~16世紀初頭

9:瓶D個、無文外反、15世紀頃

10:瓶底片
11:裝物（瓶底）

Fig.19

1~2:美濃天目碗
3:瀬戸美濃灰釉陶器底4:美濃、青磁写し碗
5:信楽慶應
6:備前、徳利

7:李朝（または初期唐物・肥前系陶器底）

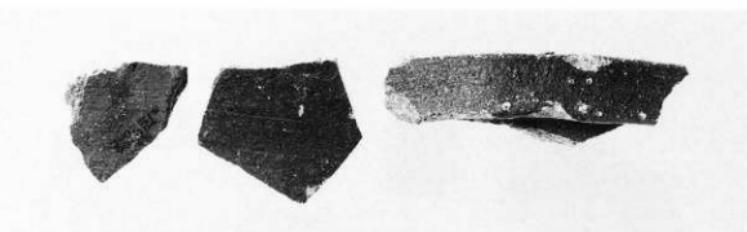


Fig.20 包含層出土遺物 写真⑧ (瓷器系陶器)

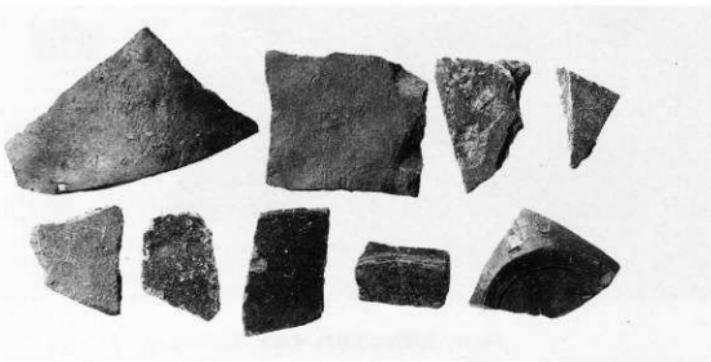


Fig.21 包含層出土遺物 写真⑨ (備前系陶器 瓢)

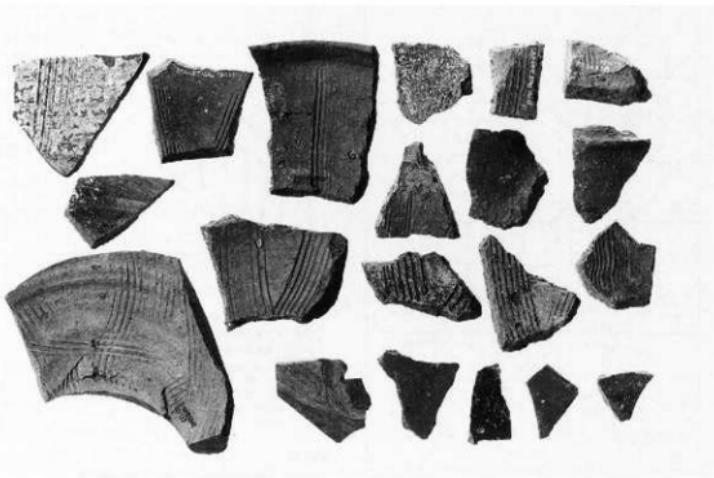


Fig.22 包含層出土遺物 写真⑩ (備前系陶器 撥鉢)

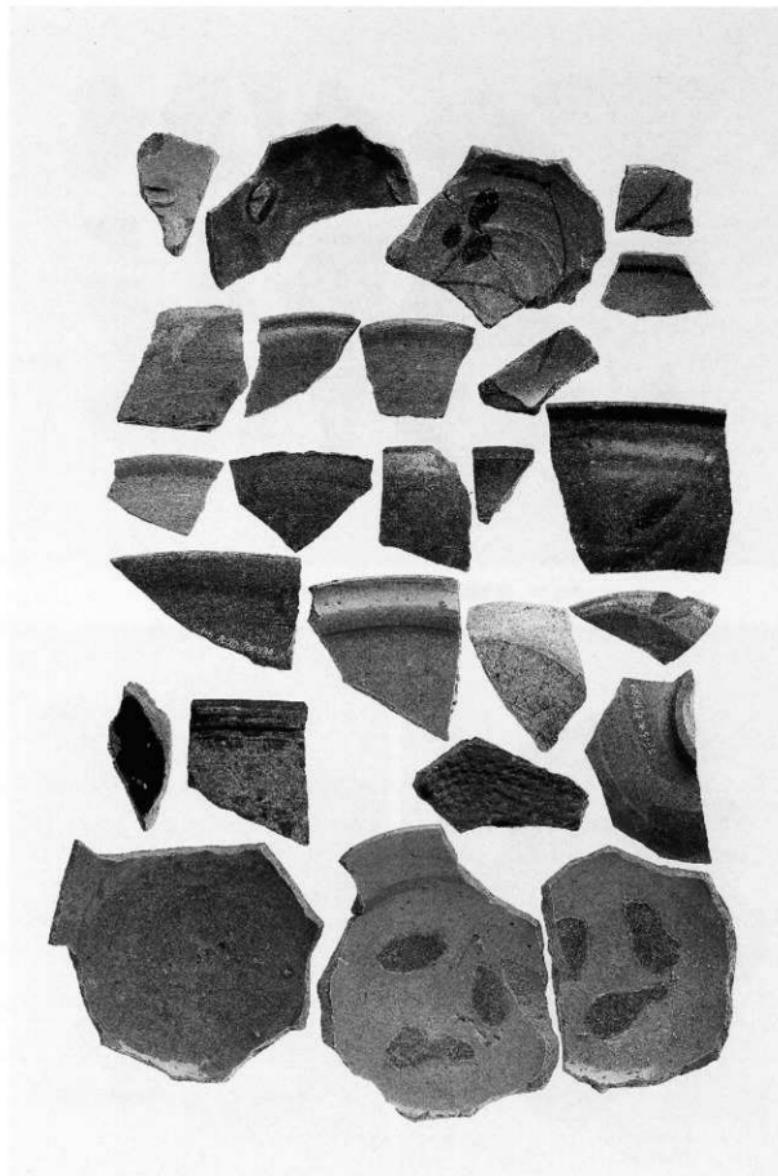


Fig.23 包含層出土遺物 写真①(肥前系陶器)

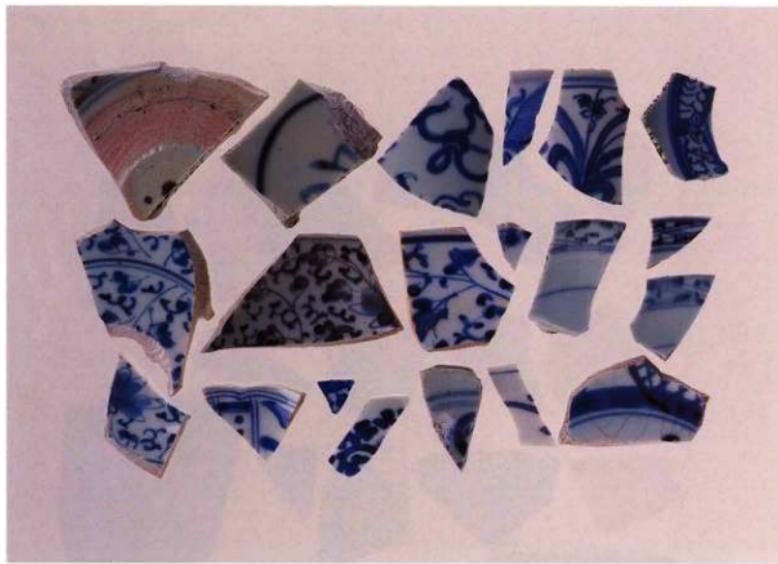


Fig.24 包含層出土遺物 写真⑫（青花皿・碗）



Fig.25 包含層出土遺物 写真⑬（陶器ほか）



Fig.26 包含層出土遺物 写真⑭（肥前系磁器）

第5章

F区の調査成果

章2 節

東京駅の図

第5章 F区の調査

第1節 F区の位置と概要

1. F区の位置と面積

東西に長い古志木郷遺跡のなかで、F区は最も西寄りに位置する（遺跡全体図は8ページFig. 3）。住宅地からやや外れ、周辺には水田が多い。調査前は水田と草地であった。調査面積は調査区の上端で3,134m²、調査区の下端（遺構面レベル）で3,000m²である。

2. F区調査成果の概要

F区で確認した遺構は、掘立柱建物跡1棟、柵列1列、溝跡20条、上坑約350穴、水田1面である。遺物は包含層から破片約6,000点が出土している。F区の調査成果のうち、主な内容をまとめると以下の通りである。

- ・弥生時代後期の包含層（F区黒色土）
- ・古墳時代後期以降の鍛冶関連遺物
（⇒第8章）
- ・奈良時代の掘立柱建物跡（SB01）と柵列（SA01）
（⇒第7章）
- ・“”を区画する溝（SD06・13／SD12）
（⇒第7章）
- ・中世後半～近世初頭の土坑墓・火葬骨埋葬土坑（SK180など多数）
- ・近世後半以降の水田跡

3. 遺構の分布状況

F区は東西に100mの長さがあり、遺構の様相は地点によって異なる。遺構が多いのは東側の半分で、足の踏み場もないほどに十坑が密集し、複雑に切り合っている。ほとんどが中世後半以降のもので、現代のゴミ穴や水路跡のようなものまで含まれる。第3節で述べる火葬骨と炭を埋めた上坑もF区東側に集中している。またG区から連なっている掘立柱建物群の広がりも、F区東寄りのSB01が西限で、それより西には建物跡は見られない。

調査区の南辺は放水路事業地の範囲を境界としたが、さらに南側の微高地へと遺構は続くようだ。北側は神戸川へむけて地形が下が

り、近世以降の水田耕作によってそれ以前の遺構面が削られている。したがって古い（中世以前の）遺構面が残されている範囲を調査対象とした。

遺構が集中する東半と比して、F区西半は遺構が少ない。北壁沿いと南壁沿いの地形が下がっており、中央部付近が突き出した中洲状に高くなっている。調査区北壁沿いでは木杭を作った堤で区画された水田跡と畠跡を確認した。また南壁沿いでは低まった地山の上に黒色土が堆積しており、この中に弥生時代後期の土器が集中して包含されている。ゆるやかな流路か、低湿地の跡とみられる。このような弥生時代の包含層はここだけで、他では全くみられない。

この黒色土が堆積する南壁沿いのさらに南隣、調査区の外にはわずかな高まりがあり、放水路事業の直前まで墓地として利用されていた。航空写真Fig. 28で木立になっている部分が相当する。この墓地の一角が調査範囲にかかるており、F区南西隅で墓地と一連とみられる近世初頭の土坑墓群（SK12ほか）を調査している。埋葬に関わる土坑は中世後半にF区東半で多数集中していたが、近世初頭以降は調査区内で全く確認されない。近世以降は墓域が別の場所に移動したとみられる。

4. 次節以降の構成

F区の遺構全体図をFig. 27に掲載した。またFig. 29～36ではこれをさらに分割して詳細図を掲載している。

次節以降はF区の遺構を年代を追って解説する。第2節が弥生時代後期の包含層であるF区黒色土と弥生時代の十坑、第3節が中世後半～近世初頭の埋葬遺構、第4節が近世後半以降の水田遺構、第5節がその他の土坑・溝跡出土遺物の順である。官衙に伴う掘立柱建物跡・柵列・溝跡と鍛冶関連遺物については別章を設けることとし、ここではふれない。

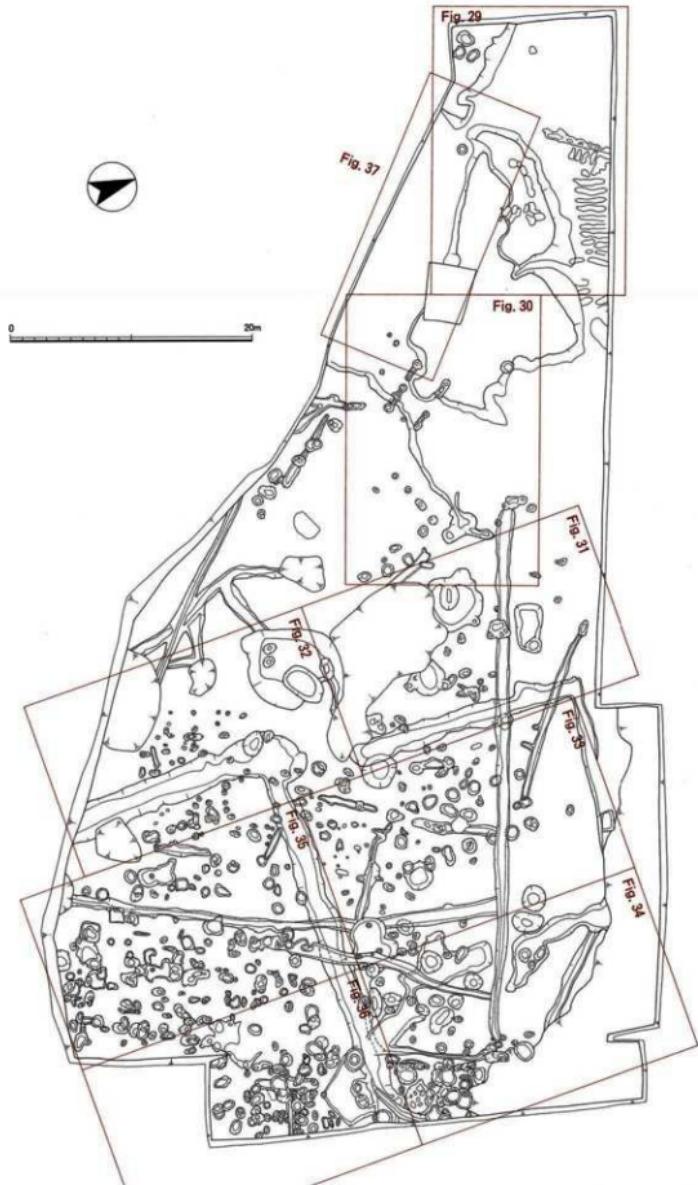


Fig.27 F区全体図 ($S=1/400$)



1：真上からの俯瞰 2：南西から、奥は出雲市街地と島根半島北山山系 3：南東から、奥が神戸川下流 4：北から、奥は古志集落と中国山地に連なる山塊（平成10年8月20日撮影）

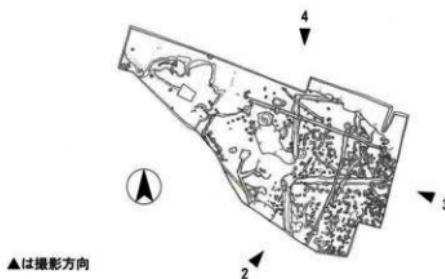


Fig.28 航空写真 F区全体と周辺の環境

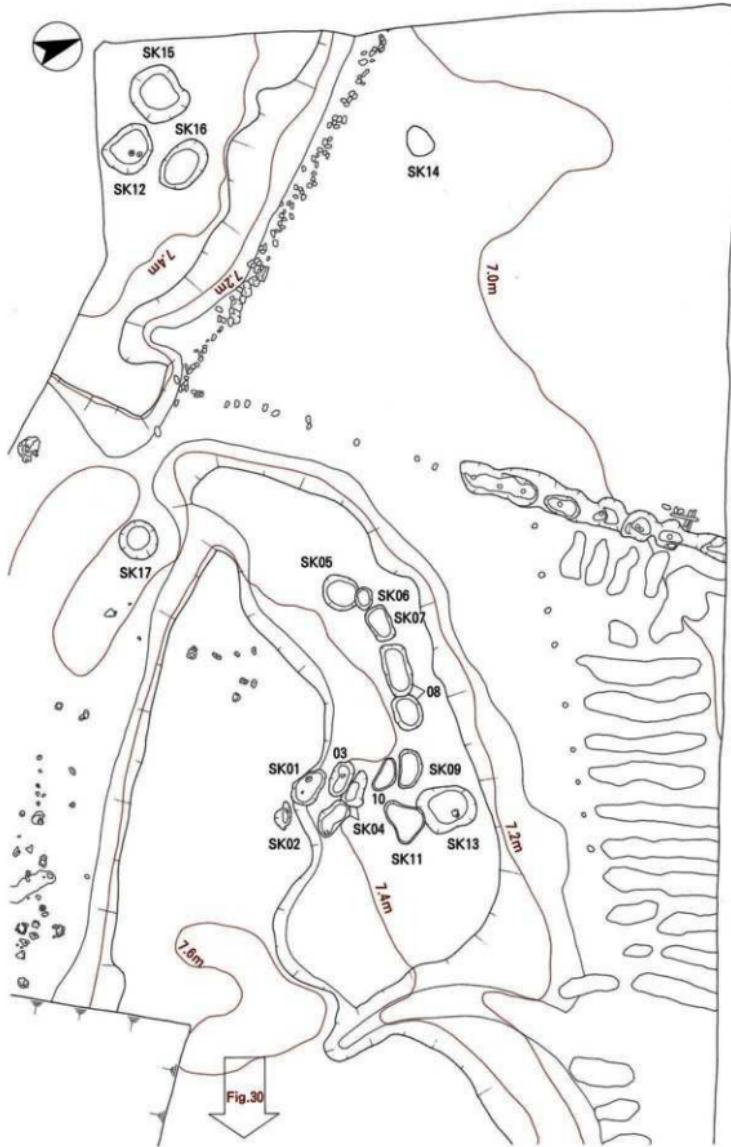


Fig.29 F区遺構配置図① (S=1/100)

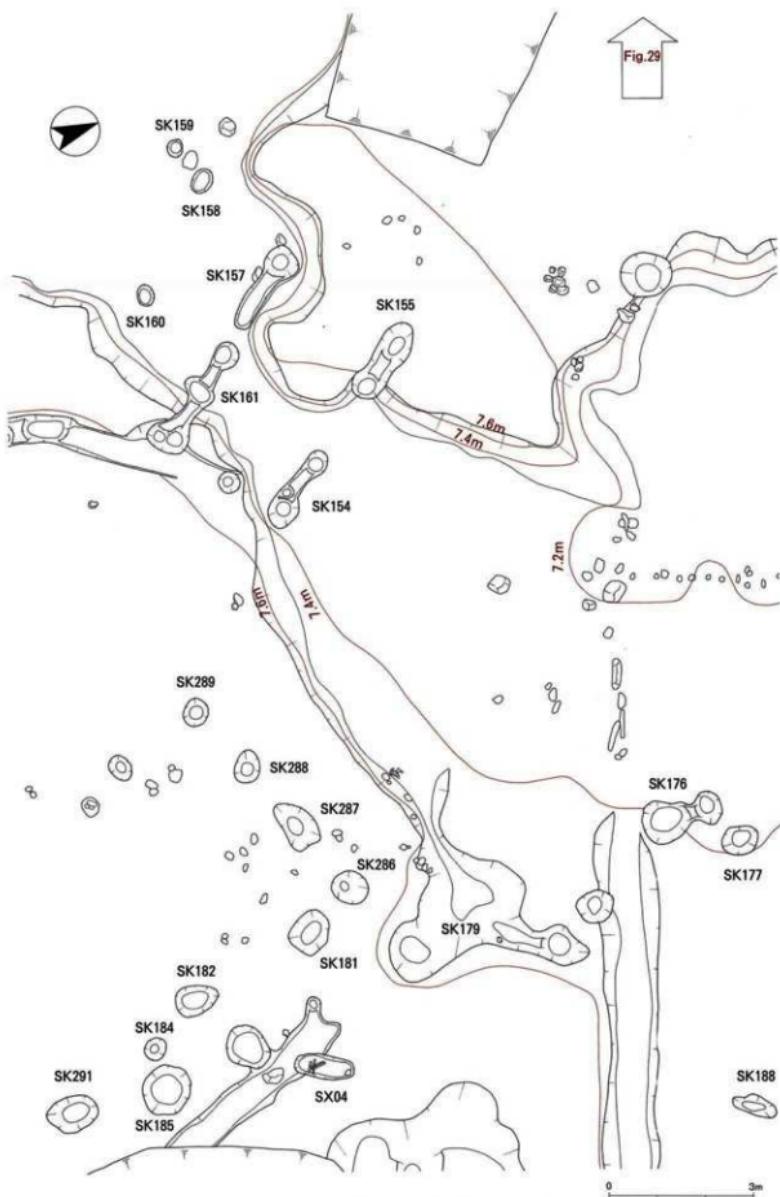


Fig.30 F区遺構配置図② (S=1/100)

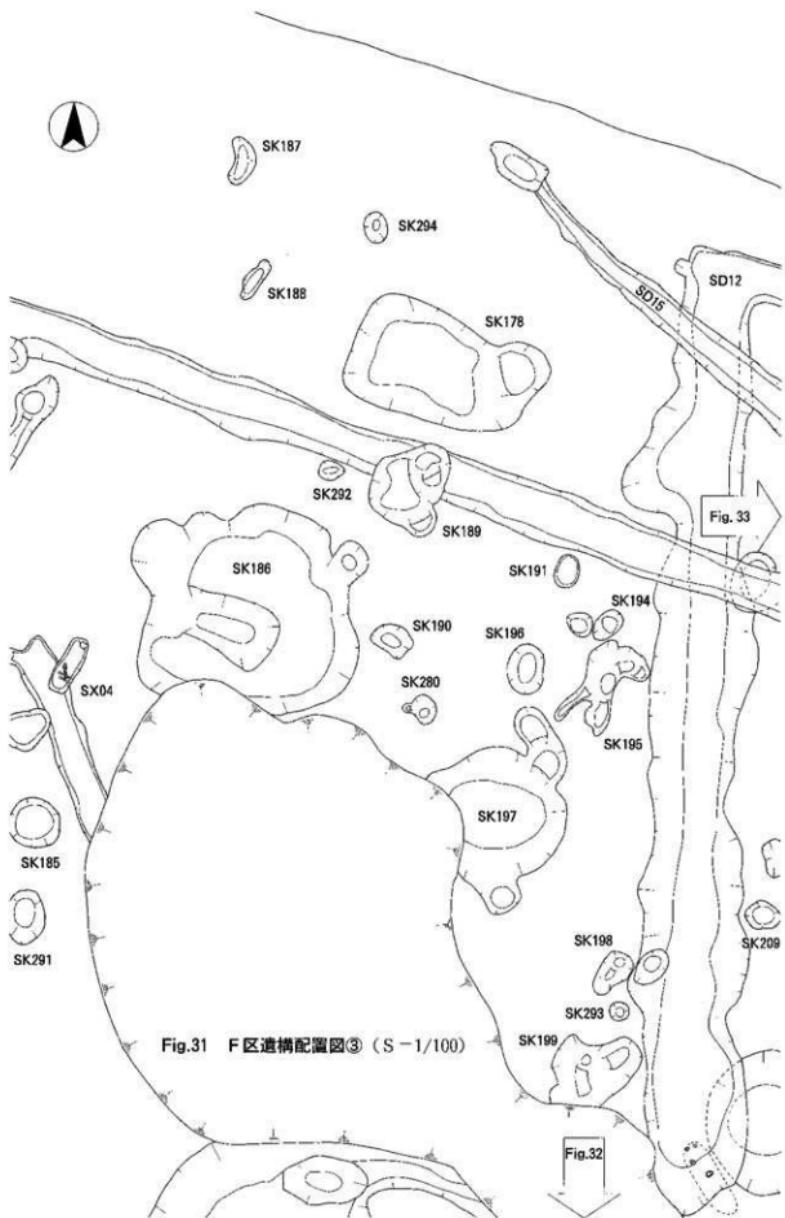


Fig.31 F区造構配置図③ (S - 1/100)

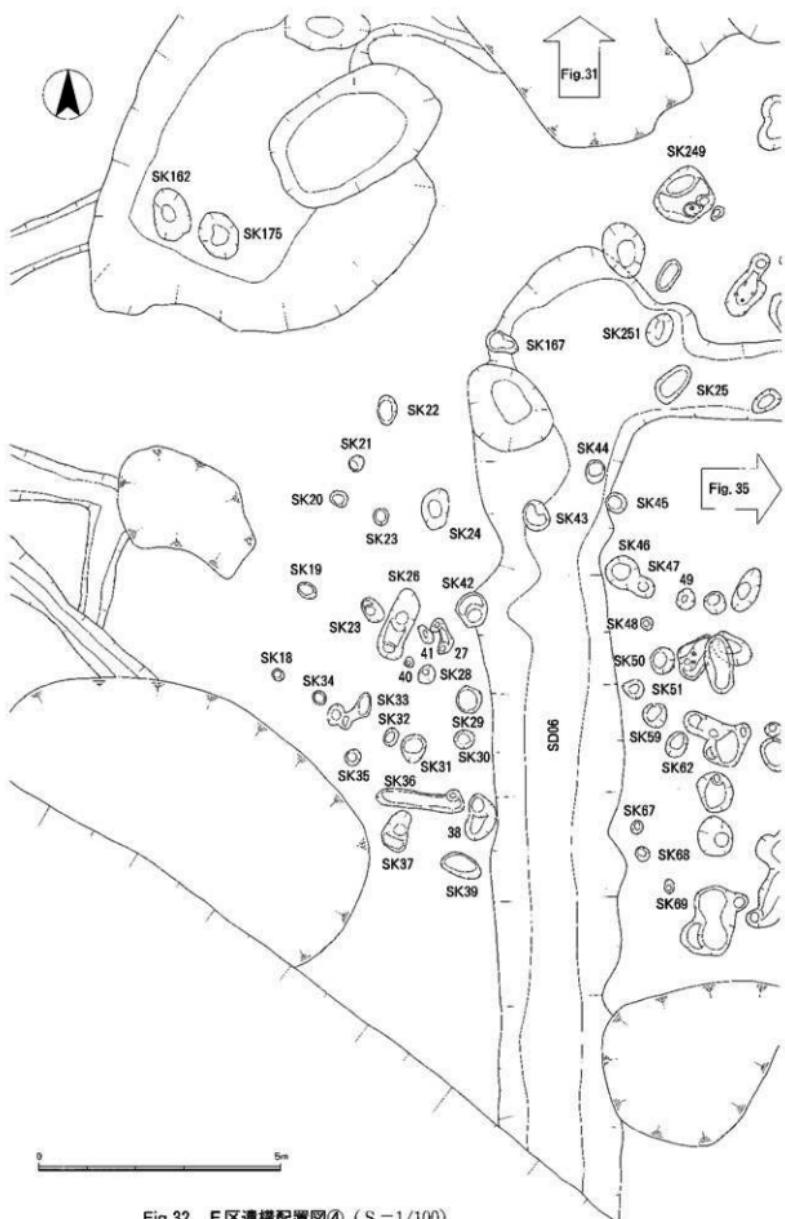
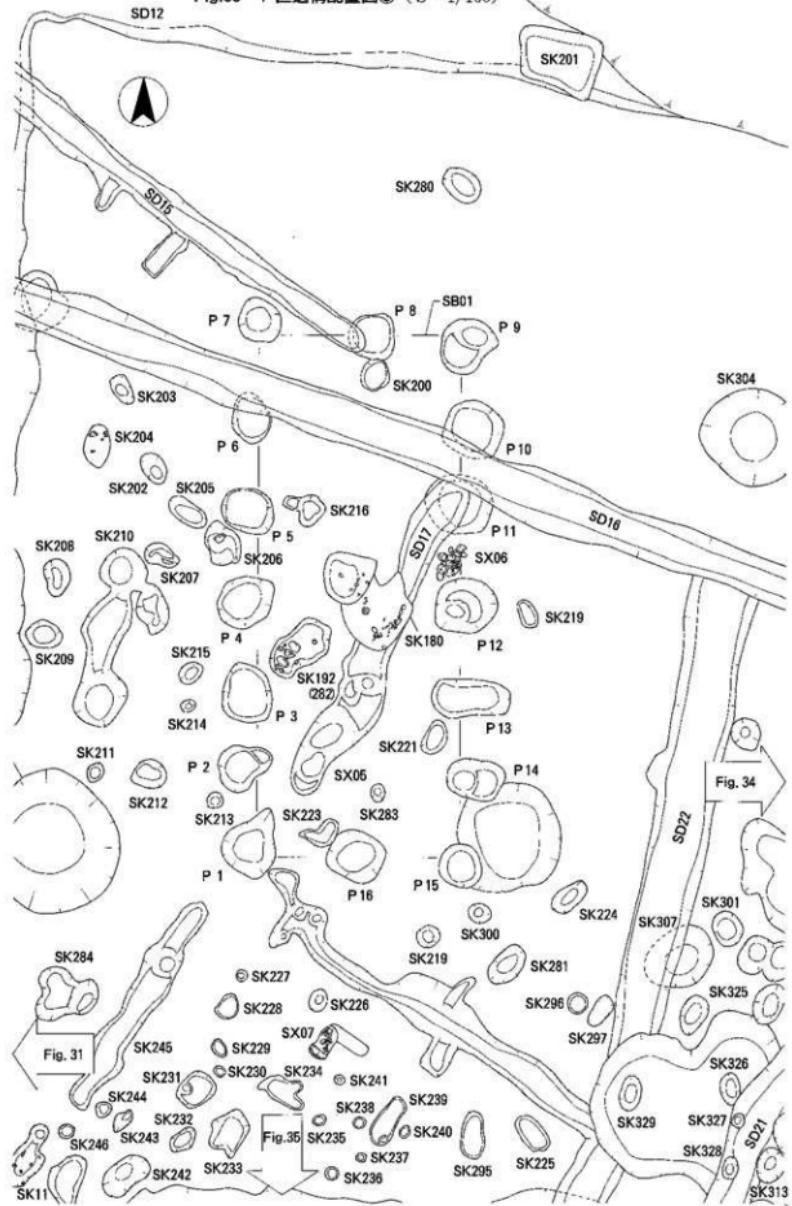


Fig.32 F区遺構配置図④ (S-1/100)

Fig.33 F区造構配置図⑤ (S=1/100)



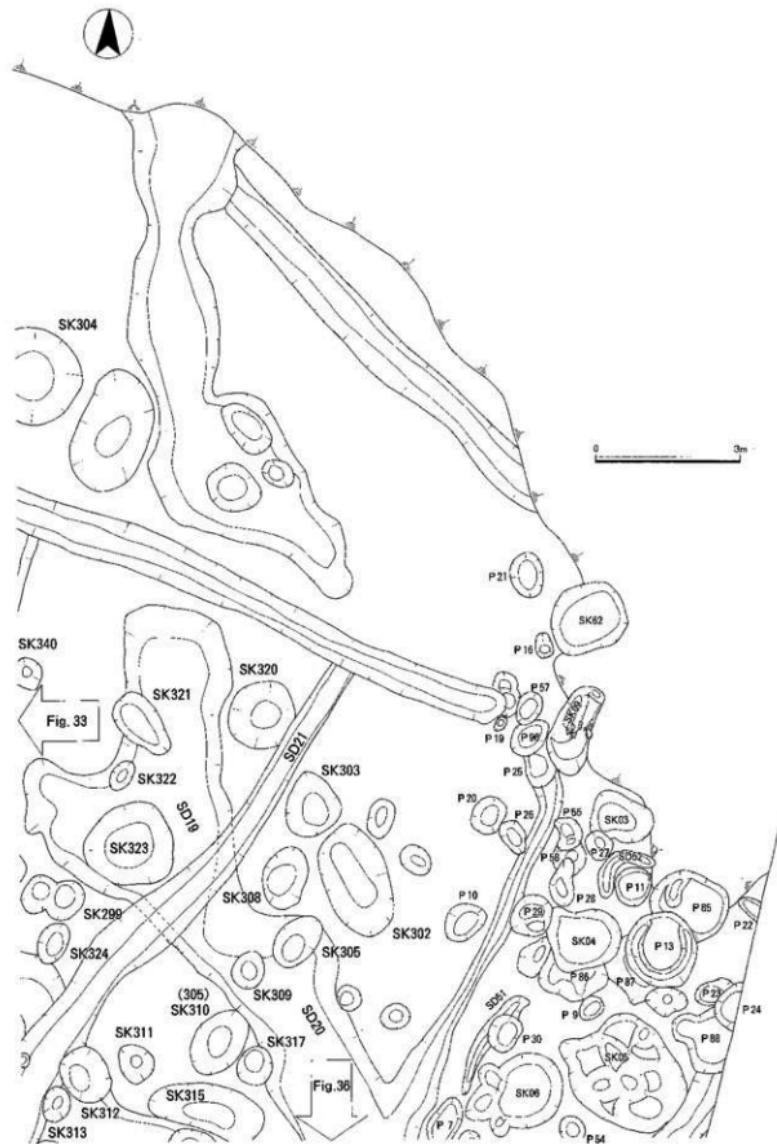
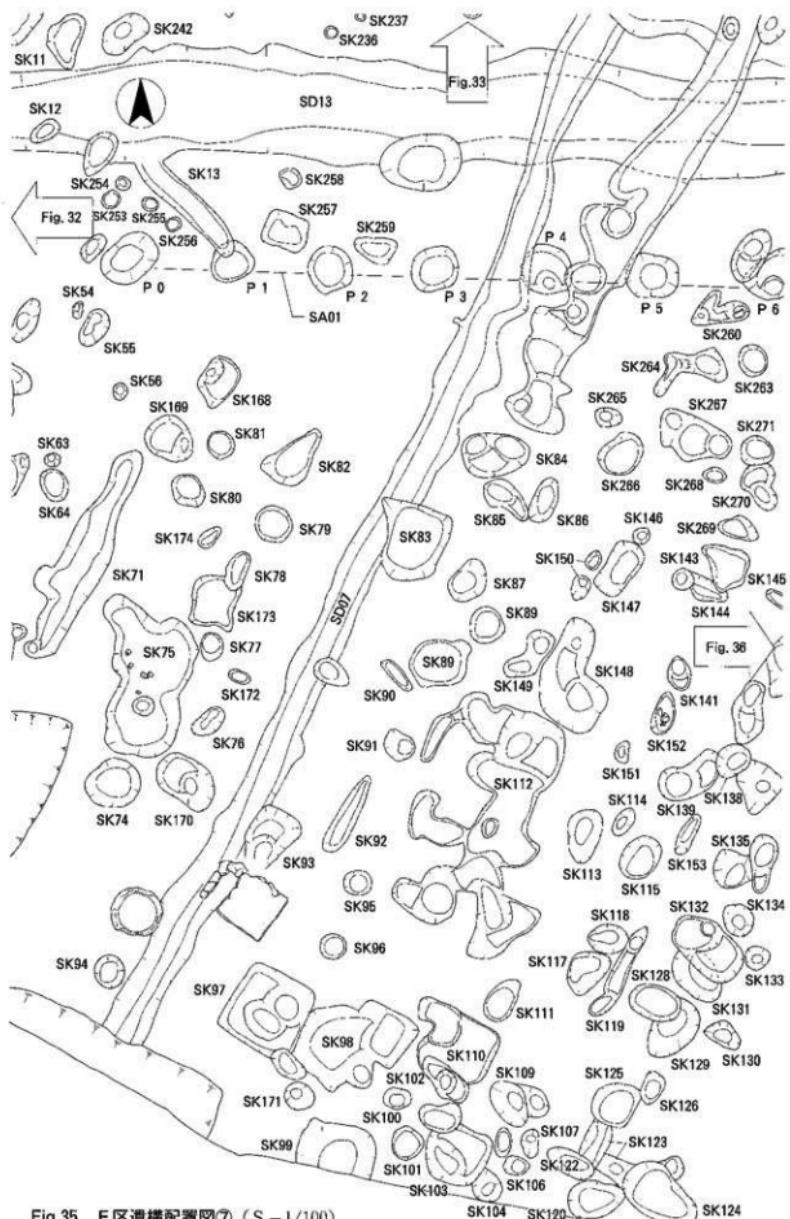


Fig.34 F区遺構配置図⑥ (S=1/100)



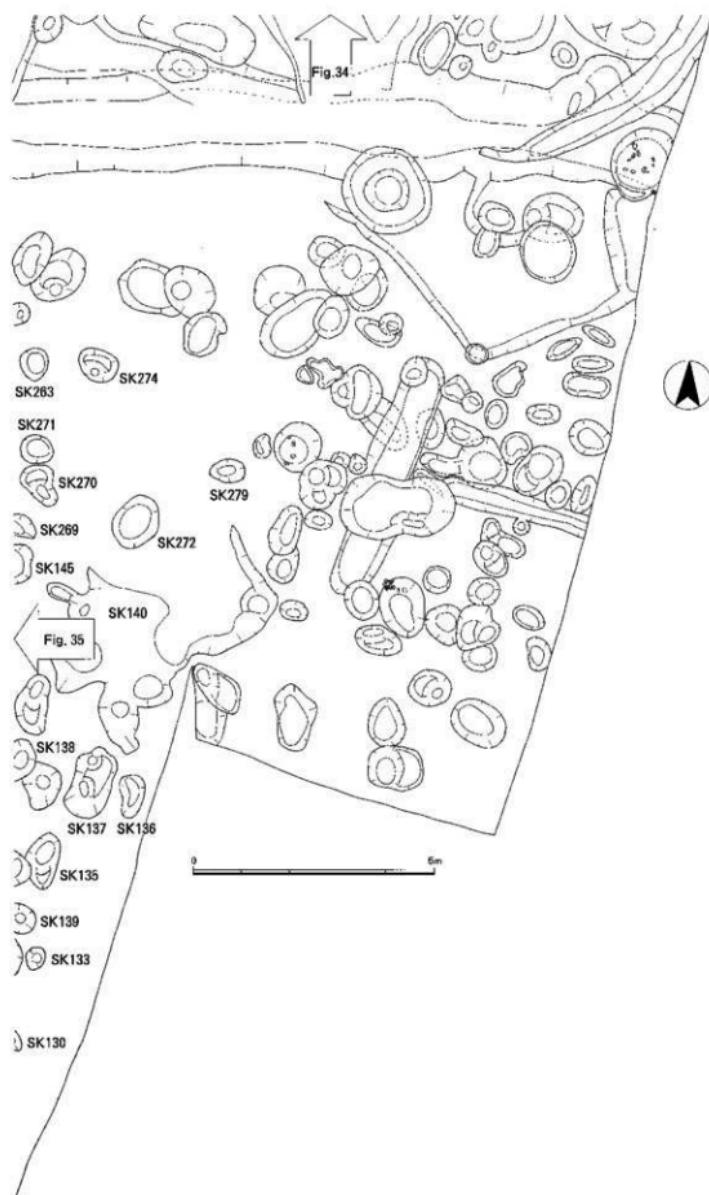


Fig.36 F区造構配置図⑧ (S=1/100)

第2節 F区・弥生時代の 遺構と遺物

1. F区黒色土の堆積状況

前節で述べたように、F区西端の南壁沿いには弥生時代後期の遺物包含層が堆積している。その調査範囲は約140m²で、全体図をFig. 37に示した。(広域図はFig. 27参照) 半島状に突き出した調査区中央部と比べ地山が約40cm低くなっている、そこに未分解の有機質を多く含む黒色の粘土質土が堆積している。この黒色土は調査区外へも続く可能性があり、どのように広がっているのかは明らかではない。堆積が進んだ弥生時代の地形を復元するならば、この黒色土が溜まった地山の低まりは神戸川へ注ぐ流れのゆるやかな流路の縁辺か、複雑に発達した砂州に取り残された(後背)湿地で、草地化しながら徐々に埋まつたものと考えられる。流路だとしてもそれほど大きな水の流れは無かったであろう。

2. F区黒色土 遺物の出土状況

遺物は黒色土のほぼ最上面近く、海拔7.5mに集中して出土した。地山面から30cmほど浮き上がっており、流路・湿地がほぼ埋まりきった段階で持ち込まれたものと言える。黒色土は有機物が徐々に堆積して形成されたもので層位的に分層することはできないが、遺物は最上面のみにまとまっており、これ以下では全く出土しなかった。

遺物の平面的な広がりは全体図Fig. 37に示したとおりで、数カ所にまとまって出土している。以下ではそれぞれのまとまりごとに解説する。

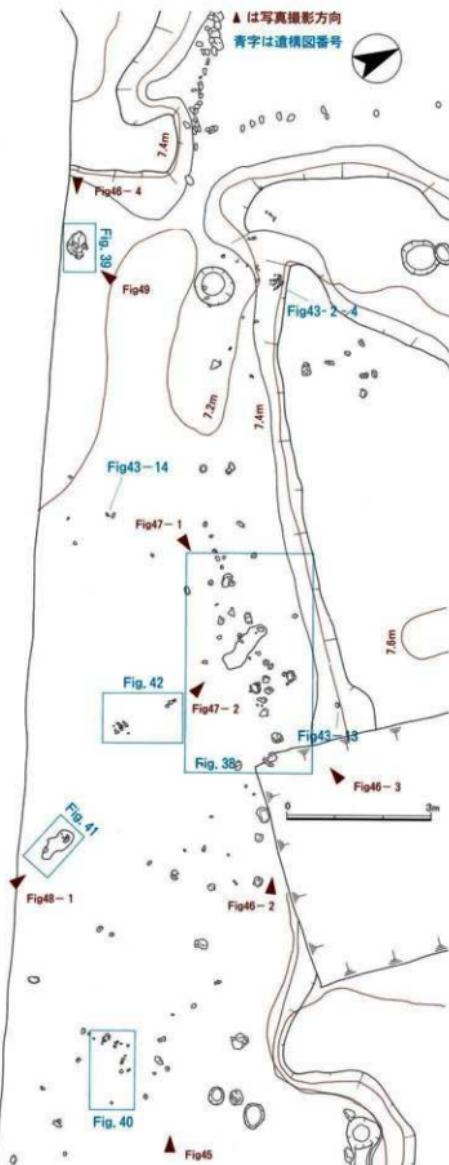


Fig.37 F区黒色土 全体図 (S=1/100)

3. SX01付近

Fig. 38に示した。黒色土の上面を精査したところ、20cm人の自然右角蹠が東西方向一列に並んで検出された（写真Fig. 46-2）。この石列の中間あたりに上色が周囲と異なりやや明るい褐色を呈する部分が認められた（写真Fig. 47）。これをSX01として精査した結果、人体が膝を屈折し横臥状態で置かれたものと判明した。組織の大半は腐朽して残存しなかったが、わずかに頭骨と脊椎から大腿骨にかけての一部が残存している。これによって、主軸を南北にとり頭位を北に、体正面を西に向けて埋葬されていることがわかる。原位置を保っているとすれば座高約80cmの成人に復元される。上色が変わっている範囲は長軸110cm、幅40cm弱で、指などの痕跡である可能性もあるが、輪郭が不定形であることから人体の有機組織が影響を与えた範囲とみるべきだろう。この異なる上色は非常に薄く、3cmほど削ると無くなってしまった。何處か周辺を精査したが、SX01の外側には掘りかたは検出できなかった。

SX01を中心とする東西方向の石列の中に弥生土器（実測図Fig. 43-1～4）が混じっており、石列が置かれた時期は弥生時代後期と判断できる。しかし、これらの石列・弥生土器とSX01が同時期であるかは即断できない。それは以下の理由による。この石列とSX01はほぼ同一平面上で検出されており、しかも残存していた人骨は体部の最下部であった。したがって、実際には遺体は全体に石列よりわずかに高いレベルに置かれている。石列はわざわざ地面を掘り下げて並べた物ではない限り、当時の地表面に置かれたものと考えるのが自然であるから、埋葬が石列と同時期であるならば遺体は地表面にさらされた状態で置かれたことになる。しかし頭骨や大腿骨が残存している状況からみて、地表にさらされていたとは考えにくい。後述するようにこの黒色土からは中世後半の土師質土器が人為的に重ねたり並べた状態で出土しており、SX01の埋葬人骨も中世後半以降のものと考えるべきであろう。黒色土に掘り込まれた遺構は埋土が同じ場合非常に輪郭が認識にく

く、検出できなかったが土師質土器・SX01は共に掘りかたをもって埋められた可能性が高い。

SX01の埋葬と無関係であるとすれば、石列と弥生土器の性格は明らかではないが、配置からみて人為的に置かれたものである可能性が高い。石列に伴って出土した土器は4個体が実測可能であった（Fig. 43-1～4）。壺3個体と台付壺1個体である。1の壺は口縁部付近と体部下半が至近距離から出土しており、接合はしないが同一個体とみて図上で復元した（Fig. 50左）。2は外面が赤色に塗彩された台（脚）の部分で、壺の基部にあたるくびれ部分には凹線が5条施されている。出土したのは台部分のみだが、想定される全體は算盤玉形の器形で、密に施文された装飾性の高い蓋が乗っていたものとみられる。弥生時代中期末から後期初頭にみられるものである。

4. 弥生土器壺①（土器棺）

山土状況図をFig. 39に、山土状況写真をFig. 49に示した。黒色土の堆積範囲西端近くに、横倒しの向きで上庄により潰された状態で出土した。掘りかたは検出できなかった。大型の壺1個体分に復元されたが、土中で上面になっていた側は破損が多く、完全個体には復元できなかった。黒色土の上面が櫛乱を受けているためとみられる。壺は一重で、外側被覆用の別の土器などは無い。口縁側にやや離れて点在していた破片はこの壺と接合しないため、蓋として閉塞に用いられた可能性がある。土器棺として埋置された可能性が高い。壺自身の実測図はFig. 44に、写真をFig. 50左に示した。器高54cmの大型の壺で、拡張した口縁端部側面に3条の凹線文を施す。弥生時代後期初頭のものとみられる。体部外面は下から上へとストロークの長いハケ目で最終調整されており、内面は頸部の少し下までケズリが及ぶ。外面の体部下半には焼成時の黒斑が大きく残る。

5. 弥生土器甕②

出土状況図をFig. 40に示した。甕の破片が1mほどの範囲に散らばって出土した。遺物の実測図はFig. 43-5・6に、写真をFig. 51に掲載している。肩部に板状工具の角による連續刺突文を2段に施す弥生土器甕1個体に復元される。平底の底部は接合しないが同一個体であろう。

6. SX02付近

遺構図をFig. 41に、遺構写真をFig. 48に示した。SX01と同様の埋葬された人体痕跡である。頭骨の一部と、歯牙1カ所以外は完全に腐朽している。位置関係から残存しているのは右側頭部の頭骨であり、体の正面を西に向かって、頭位を北に埋葬されているものと推定される。SX01と同様、土色が周囲と異なる部分が不定形に検出されており、これが人体の痕跡ととどめると思われる。これが忠実に有機物の範囲を示すのであれば、横向きに膝を曲げた体勢で埋葬されていることになる。時期を示すものは無いが、有機組織の遺存状態や付近出土の土師質土器からみて中世後半以降のものとみるべきだろう。

7. 中世以降の遺物

F区黒色土は弥生時代後期の遺物包含層であり、出土状況からみて後世の擾乱を受けていないと思われるが、この中から明らかに時期の下る遺物がいくらか出土している。遺物実測図Fig. 43のうち7~14である。これらは2~3個体が重なったり並べた状態で出土しており、人為的に置かれたものとみられる。SX01の項で述べたように、これらの後世の遺物は黒色土中に弥生土器と混在しているのではなく、黒色土の上面から掘り込まれた遺構の中に納められていると考えるべきであろう。黒色土に掘られた遺構は、水の浸透作用などで境界が判然とせず、長時間経った遺構は非常に輪郭を把握しにくい。見逃してしまったが、実際には後世の遺物が埋められた土坑などの遺構が存在していたのだろう。

Fig. 43-7は単純口縁の土師器甕で、出土状況はFig. 42に示した。時期は定かでな

いが、古墳時代後期以降の可能性が高い。

Fig. 43の8~14は中世土師質土器の壺・皿である。

8と9は2個が重なった状態でSX01から1.5mの距離で出土した。出土位置はFig. 38に示している。10~13の上師質土器皿3個体は水平に並べた状態で出土した。出土状況はFig. 42に示している。

これらの上師質土器は人骨付近から出土していることや置き並べられた出土状況などからみて、埋葬に伴って供献されたものとみられる。他の陶磁器や銅錢などを一切伴わないため、時期について限定することはできないが、強いて土師質土器の形態からみると。

8. SK176

F区では包含層黒色土以外に弥生時代の遺物は少なく、SK176は弥生時代の遺物を伴う数少ない遺構の一つである。F区の中央に位置し、包含層である黒色土とは20mほど離れている。遺構図をFig. 53に、写真をFig. 54に示した。なお周辺図はFig. 30に、広域図はFig. 28に示している。2つの上坑がつながったような形状だが、実際には前後関係にあり切り合っているとみられる。弥生土器が出土した方の土坑は平面格円形で、長軸1.0m、短軸0.8m、最深部で検出面からの深さ約50cmである。底面は平らでなく丸みをもつ。土器は括埋土の中位よりや上方から、ほぼ水平に倒れた状態で出土した。出土時には体部の半分近くを欠いていた。器高が10.0cm、口縁径が9.0cmの非常に小型の甕である。肩部に間隔の狭い波状文が施されている。このほかには一切遺物が無く、遺構の性格は不明だが、上坑蓋に小型の甕が供献されたもの可能性がある。

Tab. 8 F区黒色土出土遺物 観察表 (実測図Fig. 43・44、写真Fig. 50~52)

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | | | 色調 | 調整 (内面/外面/特記事項) | 残存度 |
|----|-------|-----|--------|------|------|---|--|----------------------|
| | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 1 | 弥生土器 | 甕 | 19.4 | | 5.0 | 内外面:灰黄褐色 | 内面:口縁部コロナデ、頸部以下斜め方向へのラケズリ、体部下半部方向に向きのヘラケズリ、底部指押さえ／外面:口縁部3条の凹線文、頸部側面ヨコナデ、肩部以下紙方向のハケ目、部分的にハケ目ナデ消し、体部下半部なナデとヘラミガキ、下平片側に呪付名 | 口縁部と体部下半部が全周残存、頂上で合成 |
| 2 | 弥生土器 | 甕 | 20.8 | - | - | 内外面:褐褐色 | 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリの後ヨコハケ／外面:口縁部へ頸部ヨコナデ、肩部タテハケの後ヨコナデ | 上半部のみ、全周の15% |
| 3 | 弥生土器 | 台付壺 | - | - | 13.8 | 内面:浅黄褐色 外面:赤色塗彩 | 外面:ナデ、赤色塗彩、胸くびれ部に5条の凹線文、脚輪部に3条の凹線文／底面:ケズリの後ゆるいナデ、上面:ケズリの後指印さえ | 脚部ほぼ完形 |
| 4 | 弥生土器 | 甕 | 26.0 | - | - | 内外面:にぶい赤褐色 | 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ／外面:口縁部3~4条の凹線文、頸部以下ヨコナデ | 口縁部のみ、全周の50% |
| 5 | 弥生土器 | 甕 | 21.0 | - | - | 内面:黄橙色 外面:植色 | 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ／外面:口縁部5条の凹線文、肩部2段の突込み、ヨコハケ、頸部ヨコナデ、以下タテハケ | 上半部の40% |
| 6 | 弥生土器 | 甕 | - | - | 5.6 | 内外面:灰黄褐色 | 内面:縦方向のヘラケズリ／外面:ナデ | 底部のみ60% |
| 7 | 土師器 | 甕 | 16.9 | - | - | 内外面:にぶい黄橙色 | 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ／外面:不定方向のナデ、部分的に指印さえ、外面全面に黑色塗装 | 上半のみ、全体の50% |
| 8 | 土師質土器 | 壺 | 13.5 | 4.0 | 6.7 | 浅黄褐色 | 内面:回転ナデ／内面底部:ナデ／底面:回転糸切り | 完形 |
| 9 | 土師質土器 | 壺 | 13.0 | 4.2 | 6.0 | 明褐色 | 内外面:回転ナデ／底面:回転糸切り／内面見込みにらせん状の回転ヘラケズリ | 完形 |
| 10 | 土師質土器 | 皿 | 7.6 | 1.7 | 4.3 | 浅黄褐色 | 内外面:回転ナデ／底面:回転糸切り／内面見込みにらせん状のナデ痕が溝状に残る | 完形 |
| 11 | 土師質土器 | 皿 | 7.5 | 2.1 | 4.0 | 灰黄褐色 | 内外面:回転ナデ／底面:回転糸切り／内面指印さえ | 80% |
| 12 | 土師質土器 | 皿 | 11.1 | 2.8 | 6.3 | 浅黄褐色 | 内外面:回転ナデ／底面:回転糸切り | 完形 |
| 13 | 土師質土器 | 皿 | 11.9 | 3.1 | 5.4 | 明褐色 | 内外面:回転ナデ／底面:回転糸切り、ほぼ完形 | |
| 14 | 土師質土器 | 皿 | 11.5 | 2.3 | 7.3 | 浅黄褐色 | 内外面:回転ナデ／底面:回転糸切り | 60% |
| 15 | 弥生土器 | 甕 | 26.3 | 53.2 | 8.1 | 内面:上半にない橙色、下半部黄褐色～灰黄褐色 外面:口縁～肩部は暗褐色～黄褐色、体部剖面黒斑、体部下半～底部暗褐色、全面に縦口状の橙色鉄分斑 | 内面:口縁部ヨコナデ、体部上半横方向を中心とした不定方向のヘラケズリ、ただし風化進み調整不明瞭、体部下半横方向のヘラケズリ、底面不定方向の粗いヘラケズリ 外面:口縁部3条の凹線文、頸部ヨコナデ、肩部以下単位の細かいタテハケ、底面近く紙方向のヘラミガキ、最下部横方向のナデ、底面ヘラケズリ | 片面のみ、全体の40% |

Tab. 9 F区SK176出土遺物 観察表 (実測図Fig. 53、写真Fig. 54)

| 種別 | 器種 | 法量(cm) | | | 色調 | 調査 (内面/外面/特記事項) | 残存度 |
|------|----|--------|------|-----|----------|--|--------|
| | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 弥生土器 | 甕 | 9.0 | 10.0 | 2.7 | 内外面:灰黄褐色 | 内面:口縁部:ヨコナデ、以下ヘラケズリの後ナデ／外面:口縁部～頸部ヨコナデ、以下ナデ、口縁端部に4条の凹線文、肩部に6条の波状文 | 全体の50% |



Fig.38 F区黒色土 遺構図① (SX01) ($S=1/20$)

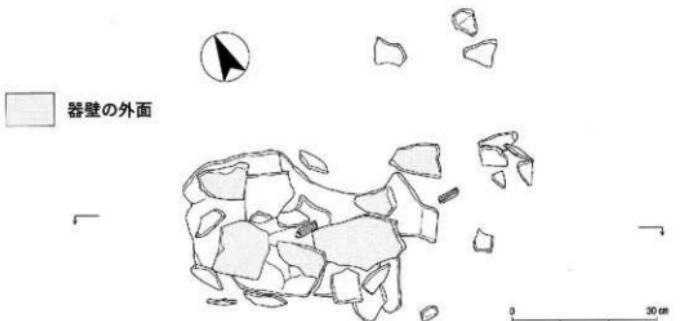


Fig.39 F区黒色土 遺構図② (S=1/10) (遺物実測図Fig.43)



Fig.41 F区黒色土 遺構図④ (SX02) (S=1/20)

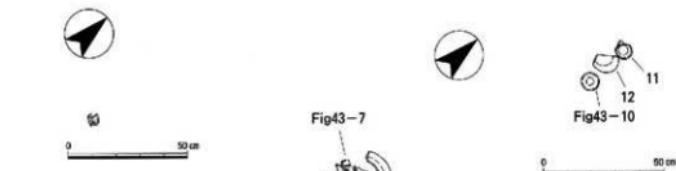
Fig.40 F区黒色土 遺構図③
(S=1/20) (遺物実測図Fig.43-5,6)

Fig.42 F区黒色土 遺構図⑤ (S=1/20) (遺物実測図Fig.43-7,10~12)

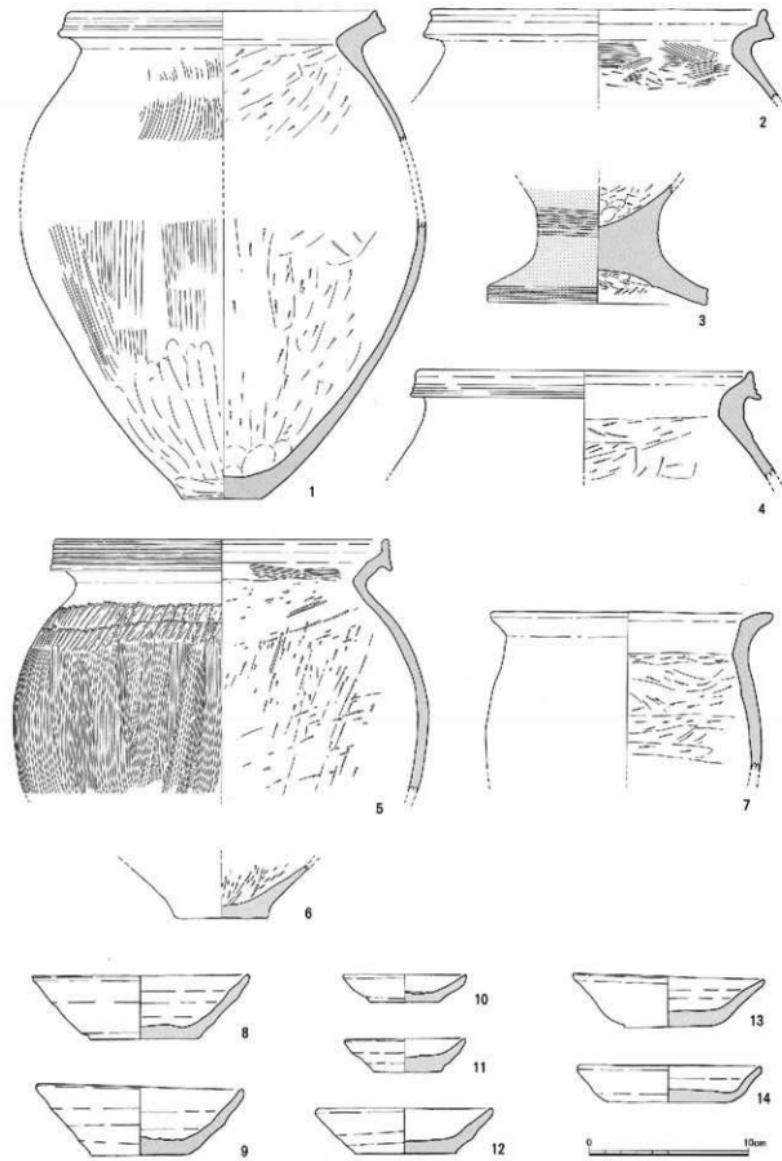


Fig.43 F区黒色土 遺物実測図① (S = 1/3)

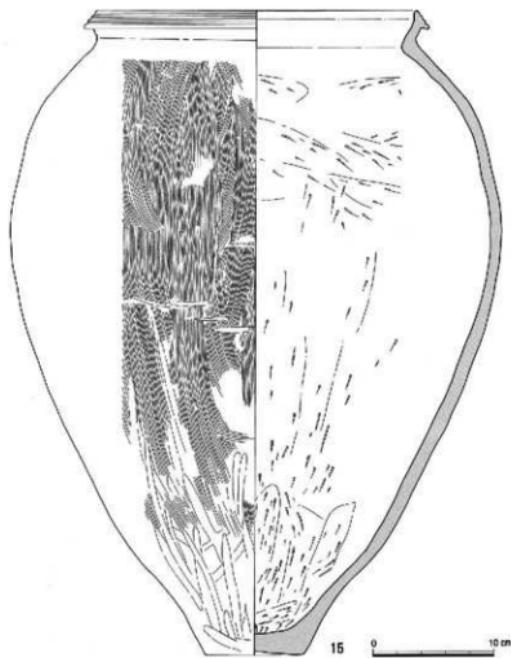


Fig.44 F区黒色土 遺物実測図② (S = 1/4)



Fig.45 F区黒色土 遺構写真① (遺物の出土状況、南東から)



Fig.46 F区黒色土 遺構写真②



1 : SX01（人骨）と石列、土器の
検出状況（西から）
2 : 同（南から）

※撮影方向はFig. 37に図示

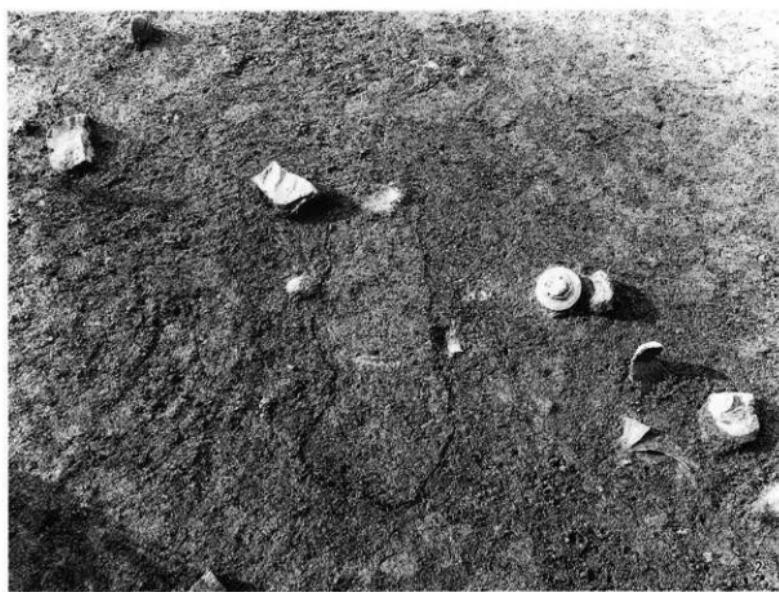


Fig.47 F区黒色土 遺構写真③

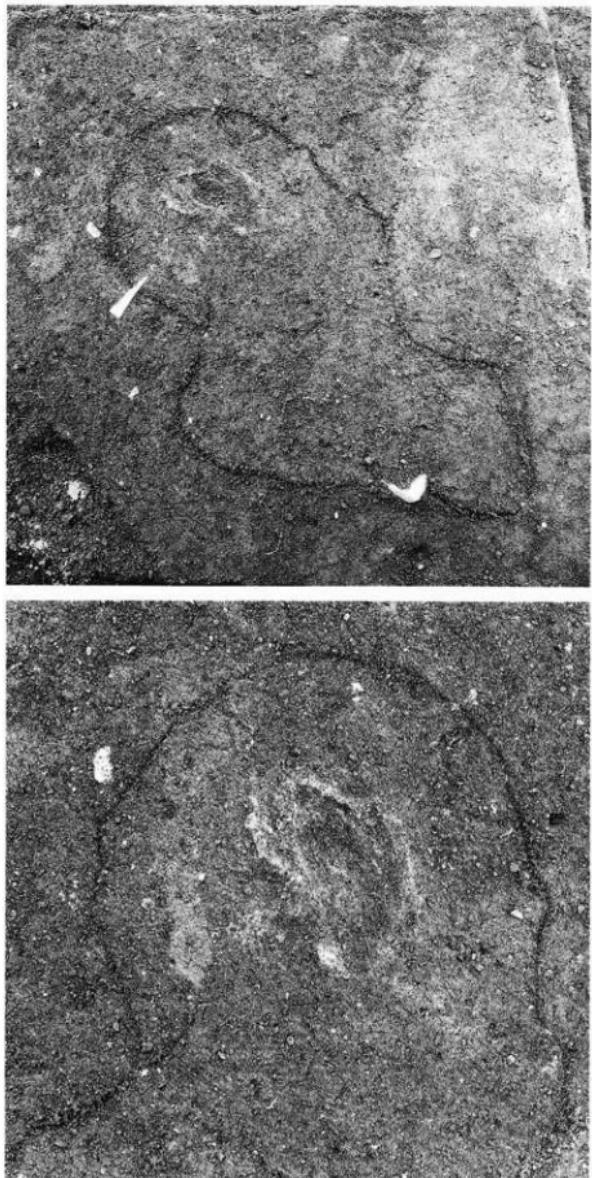


Fig.48 F区黒色土 遺構写真④